

平成 19 年度  
かながわ生涯スポーツコンベンション  
報告書

スポーツが高める人間力

開催日：平成 19 年 12 月 16 日（日）

会 場：横浜市開港記念会館

主 催：神奈川県教育委員会

## 目 次

開催概要	1	
主催者あいさつ	2	
来賓あいさつ	3	
1部 基調講演		
【 人の育て方・伸ばし方 】	渡辺 元智	4
2部 シンポジウム		
趣旨説明【スポーツが高める人間力】	早瀬 健介	19
発表1「スポーツ指導者が取り組む もう一つの社会貢献を！」	加藤 保房	20
発表2「子ども達にさまざまな スポーツとの出会いの機会を」	天野 勤	22
発表3「日本の子ども達に スポーツの道をひらけ」	金川 純子	24
パネルディスカッション		27

## 開 催 概 要

- 1 全体テーマ  
「スポーツが高める人間力」
- 2 開催日  
平成 19 年 12 月 16 日（日）
- 3 会 場  
横浜市開港記念会館  
〒231-0005 横浜市中区本町 1 - 6
- 4 主 催  
神奈川県教育委員会
- 5 後 援  
横浜市市民活力推進局、(財)神奈川県体育協会  
神奈川県体育指導委員連合会、NPO 法人神奈川県レクリエーション協会
- 6 内 容
  - (1) オープニング  
主催者あいさつ・来賓あいさつ
  - (2) 1 部 基調講演  
「人の育て方・伸ばし方」  
渡辺 元智 （横浜高等学校教諭）
  - (3) 2 部 シンポジウム  
テーマ「スポーツが高める人間力」  
コーディネーター  
早瀬 健介（東京女子体育大学准教授）  
パネリスト  
発表 1 「スポーツ指導者が取り組む もう一つの社会貢献を！」  
加藤 保房 （神奈川県スポーツ指導者連絡協議会会長）  
発表 2 「子ども達にさまざまな スポーツとの出会いの機会を」  
天野 勤 （聖徳大学教授）  
発表 3 「日本の子ども達に スポーツの道をひらけ」  
金川 純子 （やんちゃるジム代表・相模原市教育委員）

主催者あいさつ

神奈川県立体育センター

所 長 佐々木 悦子



みなさん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました神奈川県立体育センター所長の佐々木でございます。

本日は、年末の何かとお忙しい中を「平成 19 年度かながわ生涯スポーツコンベンション」にご参加いただきありがとうございます。また、皆様方には、日頃より本県の生涯スポーツ振興に対しまして格別のご理解とご協力をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。

さて、近年、社会環境の変化や価値観の多様化などで人々の生活様式が大きく変化し、その結果、生活習慣病の増大や子どもの体力低下等が課題となっております。また、家庭の教育力の低下や、地域コミュニティの希薄化などにより様々な社会問題も生じています。このような中で「交流」や「生きがい」、「健康」、「スポーツマンシップ」など、スポーツの持つ力は大変大きなものがあり、これら諸課題を解決する糸口になると考えます。

現在、本県では、県のスポーツ振興指針である「アクティブかながわ・スポーツビジョン」を策定し、誰もが、いつでも、どこでも、いつまでも参加できる生涯スポーツ振興をめざし、「スポーツのあるまち・くらしづくり」の実現に向けて、様々な施策の展開を行っているところでございます。

本コンベンションでは「スポーツが高める人間力」をテーマとし、様々な形でスポーツに携わる方々が一堂に会して、将来を担う子どもたちを豊かに育むためにスポーツはどのような役割を果たすのか、また、そのためにスポーツ環境をどのように整備したらよいのかなどについて意見交換していただき、スポーツのもつ魅力と可能性を共に模索したいと考えております。

本日は、すでにご案内のとおり、横浜高等学校教諭であり、同校の野球部監督であります、渡辺元智さんをはじめ、スポーツについて、様々な切り口からご発言をいただく講師をお招きしています。

ご参加の会場の皆様からも、忌憚のないご意見をいただきながら活発な議論がなされ、このコンベンションの開催が皆様にとりまして、実り多きものになりますよう心より願っております。

最後になりますが、本コンベンションの開催にあたり、ご尽力いただきました関係者の皆様に対し感謝申し上げますとともに、皆様のますますのご活躍を祈念申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。

来賓あいさつ

財団法人 神奈川県体育協会

専務理事 石原 春男



みなさんこんにちは。ご紹介に与りました神奈川県体育協会の石原と申します。まずは、かながわ生涯スポーツコンベンションの開催、誠におめでとうございます。大勢の御出席をいただきましたが、所長さんからお話いただいた目的を持ちまして、是非この機会を機に、更にスポーツ振興に御尽力いただければありがたいと思っています。

私どもも民間の団体ではございますけれども、神奈川県スポーツ振興に尽力をさせていただいているところでございます。スポーツの世界を振り返り、大きく捉えますと、勝敗を競うというようなスポーツ振興、そういう勝敗を経てきたスポーツ振興が、今度はスポーツ文化というように言われて久しく、その中に生涯スポーツが叫ばれるようになりました。これはスポーツが持っている運動と言うこと以外に、大きな役割を果たしているところに着目した言葉の一つというように私は理解しております。

今日、新聞を見ましたら、ある大学に学部が認可をされ、その名称が文化スポーツという名称でした。スポーツ文化といわれ、今度は文化スポーツというような事が認可された中で、その概念はどれだけの広さかという、スポーツと音楽、地域文化などをジョイントさせたスポーツ振興、そのようなものを掲げながら進めていくのではないかと大雑把に捉えて、私は受け止めさせていただきました。大きな変化の中で、スポーツの持つ多彩な魅力に世の中が注目をしてきている、そういうことは免れない事実だろうと思います。私はそういう面で、このことをスポーツの持つ付加価値と呼んでいる訳ですけども、是非、県民の方々にスポーツが持つ多彩な魅力を感じていただいて、生活の中に取り入れ、豊かな生活ができて、楽しい神奈川県づくりができれば、素晴らしいことだと思っております。

神奈川県体育協会も国民体育大会を頂点とした競技という部分のスポーツ振興をさせていただいている訳ですけど、スポーツが持っている別の意味の社会貢献をして行こうではないかということで、いじめ防止に取り組んでおります。そのポスターを公共交通機関や県内の施設に貼っていただいております。そのようなことをしながら、豊かな県民の生活づくりがスポーツを通じてできればと、願っているところでございます。

今日は渡辺先生のお話やシンポジウムで得ていただいたものを、是非、皆様方の地域でご活用いただければと思っております。今日は、長時間になりますけれども、宜しく願い申し上げます、拙い挨拶でございますけれども、私のあいさつとさせていただきます。

## 1部 基調講演 「人の育て方・伸ばし方」

横浜高等学校教諭 渡辺 元智 先生



みなさん、こんにちは。今、過分なる御紹介をいただきましたけれども、高校野球に携わって42年間が経ちました。本当は私の方がいろいろ教わりたいところです。失敗だらけの中でここまでやって来られたということは、非常に運も良かった。そして選手にも恵まれ、いろいろな野球関係者、異業種の方々にも支えられ、何とか今日まで来れたのだと思います。果たして皆さん方に、今日のテーマであります、人の育て方と言いますか、そういうものがきちんと伝わるかどうかわかりませんが、あくまでも横浜高校の42年間の自分の生き様を、あるいは選手との葛藤をあからさまに話すことによって、何か共通するものがあれば非常にありがたいなと思います。

今ここで、監督としての42年間の指導の中で、私自身を振り返ってみますと、四つか五つぐらいの変遷があり、うまくその時代時代の背景に育った選手にあてはまるような指導ができたのかなと思います。それと基本的には、人が人を動かすわけですから、そこに何が必要かと、今いろいろと反省してみますと、やはり愛情ではないかと思います。愛情がなければ人は動かない。

それから私が42年間に渡って高校野球に携わってきた信念、あるいはいろいろなことによつて得た知識、そういったものは私自身の人生にとっては大変有意義ではありますが、今の子どもたちにそのことを当てはめようと思っても、なかなか当てはまらない。そんな中で手法を変えて接したことが、たまたまうまくできたということで、今日まで来たのではないかと思います。

私が監督を始めたのは、横浜高校にお世話になったのが昭和40年ですから、高度経済成長が続いていた時代だということに思います。生徒の家庭環境を見ますと、ご両親は一生懸命家庭のために働いて、子どもを学校に安心して預けていました。私は野球部の監督ですから「監督、どうにでもしてください。預けた以上は、もう監督さんにお任せいたします。」今の若いお母さん方を見ますと、核家族の中で育った子どもたちに非常に愛情を注いでいます。それはそれでこの時代背景の中では、私は決して悪い方法ではないとは思いますが、昭和40年代と比べますと、ものすごく隔世の感がありまして、どうしても納得のいかない部分もあります。しかし生徒というのは、そういう時代背景の中で育ってきているわけですから、一概に生徒だけを責める訳にはいかないということで、まあ今、日々反省しているところです。そういうことの中で、四つ五つの変遷を振り返りながら、話を進めて行きたいと思います。

昭和40年代の高度経済成長時代の時には、親が一生懸命働いていたものですから、僕らにその子どもを安心して任せていただきました。どこの学校でも、どんなスポーツでも、どの指導者でもそうだったと思いますけれど、非常にスパルタ訓練がまかり通っていた時代ですね。私だけではありません。

私は、監督に就任したと同時に、日本一厳しい練習をやって、日本一長い練習をやれば、甲子園に近づけるだろうと、今考えてみれば非常にくだらない指導理念と言いますか、指導理念というよりか一つの自分の姿を打ち出しました。それはなぜかと言いますと、監督になり立て

の頃は野球理論も指導理念も確立されていません。そうしますと、自分が携わってきた中学、高校あるいは大学の指導者の指導方法を踏襲した形で、当てはめていくしか方法を知らなかったわけです。それでは、どれだけ厳しい練習をしたかといいますと、想像もつかないくらいの厳しい練習をやらせました。

昔、「能見台」を「八つ坂」と言いました。うちの学校は日兵産業、日本兵器産業株式会社という所の兵舎の跡を買い取り、そこで授業を行っていました。グラウンドも非常に狭かったですね。ですから、野球ができるような状況ではありませんでした。そのため「中山」にあります神奈川大学グラウンドをお借りする。あるいは「鶴見」の日本鋼管のグラウンドをお借りするという生活です。そこで練習試合をやって負ければ、そこからランニングをさせました。中山からもランニングをさせました。あるいは、平和球場、以前はゲーリック球場とアメリカの名選手の名前が付いておりましたが、その平和球場で負ければ平和球場から16号をずっとランニング。もっと凄まじいのは、それだけ苦痛だけを与えれば終わりというわけではなくて、じゃあノックをやらうと。今時、千本ノックなんて全くありえないんですね。非常に合理的に今の選手はやっておりますから、百本ぐらいがいいところですかね。今ではどこの学校にも照明設備がありますが、その当時はうちの学校だけではなく、どこにもそんな照明設備なんてありません。オースチンという車を買ってきて、そのライトの明かりで千本ノックをする。照らす方は明るいのですが、照らされる方は眩しい。監督というものは絶対的なものだと思いますし、その権力というものは非常に強いので、彼らとの間には大きな垣根がありました。したがって、彼らも眩しいとは言えません。でも今考えてみますと、彼らはそういう怖いという、あるいは無謀な指導の中でも、生きると言いますか、力強さというものを身に付けたんですかね。どうやってこれを切り抜けていくか、泣き言を言わないのです。ライトの明かりを遮って低く、低く構える。そうすると、内野手が捕球するのにいい形になるんです。だから、形や捕球動作を教えたわけではないのです。数多くやればうまくなるという中で、彼らもその中から自分の一つの形を作り出していったと言えるのではないのでしょうか。今は何でもかんでも正しいことを、野球にもいろいろな教材が出てきて、当てはめて教える場合が多くなっていますが、私は、特に小学校、中学生の生徒には自然の動きの中で自分の形を身に付けさせていくのがいいのではないかと思います。自然の動きの中で、自分の一番いい動きを見る。変に型にはめてしまうと、とんでもない方向に行ってしまう場合もあります。

昔、僕らは田舎でビー玉なんてありました。ビー玉をぶつけるのに、目の近くから投げて当てるわけです。キャッチボールの形でも、後ろにいくら手を振っても、必ず目の近くに手が通ってくる。だから、コントロールが付く。大体が、手を後ろに振ってから前へ出るわけじゃないんですね。ステップアンドスローですから。こう手を後ろに振ってからステップしますと、アームになって肩や肘を壊します。ところが、ステップアンドスローで、ここに手があればこういうふうに、丁度、肘が柔軟に上がり、前に出てきて腕が振れるようになりますと言いますか、こういう正しい投げ方が昔は自然の遊びの中にはいくらでもありました。ですから私が教えなくても、彼らは自然とそういうものを身に付けてくれたのではないかと思います。あるいは、車のライトではなく、石灰をつけてノックをする。彼らも集中力がすごい。当たった瞬間に粉がポッと飛ぶ。それで集中力が養われるのですね。右に行くか、左に行くか、判断するんです。そういう瞬間的な動き、こういう動きが身に付いていく。だから、昔の厳しい指導方法が全くだめでもないような気がするのです。この時代背景や環境の中で育った選手たちには、ある意味では、彼らにとって非常にプラスになったのではないかなというふうに思うわけです。今、彼らは40歳後半あるいは50歳を過ぎていますが、「あの時代があったから今がある」と、昔話

に花を添えてくれます。ああ、良かったなと思います。

それでは、今の子どもたちにそういうものを当てはめようとしても、それは絶対に不可能です。その頃は、師範出の先生だとか戦争を経験してきた方々が来て、軍隊式の訓練でした。我々もそれを見よう見真似で受け継いでやっていました。そのいう中で、今思いますと、体力と本当に野球がうまいこと、それと精神力。こういうものが備わった人間が最後までクラブの部員として生き残っていったわけです。虚弱であるとか、自分のきちんとした目標がない選手は、途中で挫折していきました。だから多くの犠牲の中であるいはスパルタ訓練の中で、幸いにして、今言いましたような選手たちが残っていて、昭和48年の第45回選抜大会で優勝することができました。

この時を振り返っていろいろ考えてみますと、冒頭に愛情という話をしましたが、もう時効ですから名前を出してもいいと思います。富田という選手がいたんですね。この選手が決勝戦の広島商業の時にエラーをしたんです。もうそれを捕れば優勝の瞬間に、ボールはグローブに入った。入ったけれどもはじかれた。野球をやっていれば難しい打球でも何でもないので。僕はそれまで、すごいスパルタでやっていたから、レフトのポジションからベンチへ戻ってきたら殴ってやろうと思ってこぶしを握って待っていました。ところが、ちょっと間が空きました。それは、サード側のベンチにいたので、レフト方向のことを全部は把握できませんでしたが、レフトスタンドから富田目掛けて、優勝する瞬間に投げようとしていたお祝いのテープを「富田この野郎、馬鹿野郎！」と、我が横浜高校のスタンドの応援団が投げつけたのです。そういうのがいたわけですね。でもそれが良かった。ちょっと間が空いたので、自分が冷静になれたのです。そして富田が私の目の前に来て「すみません。」と言いました。それまでは「すみません」なんて言う言葉が返ってくれば正直言ってもう殴っていました。でも、ちょっとした間があって「すみません。」と言った時に「次、打てばいいじゃないか。」とぶっきらぼうに言ったんですね。もうこの時代は、滅茶苦茶な時代で、本当につわもの、荒くれ者がいっぱいいました。不遇の時代で横浜高校が一番悪い時代でしたから、とんでもない野球部員がいました。猫は洗濯機の中に入れてしまうし、あの辺は野鳥も多く自然の宝庫ですから、蛇を捕まえてきては包丁でちょん切ってしまうし。もうとてつもなく、とんでもありませんでした。そういう私も横浜高校ですから。でも品行方正で一生懸命やって来ましたから、監督と呼ばれたと思いますけれども、いずれにしてもそういう連中ですから、涙なんて流したことはないんです。試合に負けて正座の2時間3時間、平気でじっと我慢しています。弱音を吐かない。千本ノックも受けた。いろいろ割愛させていただきますが、伊豆大島でキャンプを張ったこともあります。大島でやれば絶対逃げられない。元町港と大島港をOBで固めておけば、どんなことがあっても、あの頃は先輩後輩の関係は絶対的なものでしたから逃げられない。それでも音を上げなかった選手達です。それが涙を浮かべたんですね。そして、今まで一度もホームランを打ったことのないその富田がレフトスタンドに、それも一番距離が短いレフトのポールの所にホームランを打ったのです。今思いますと「次、お前打てばいいじゃないか」と言ったこと。彼にとっては今までそんな言葉を投げかけられたことは一度もない。そのことを私は、三十何年たった後にこう振り返って見ますと、あれが愛情と言うか、そういう言葉として理解してくれたのではないのかと。とにかく、愛情というふうに受け止めてくれたのではないのかなと思います。それからというものは、言葉の投げ方、そういうものを非常に気をつけています。言葉には味と真理があるということで、子どもによっては「馬鹿野郎、この野郎」と怒られたら、そのまんまだめになっていく生徒もいますし、叱咤激励されているなと思って、一念発起していい選手に育っていく生徒もいます。でもその時代は、そういうことを考えてもみません



でした。弱肉強食と同じように、だめなものはだめ、付いて来れる者だけだということで、まあそういう中でのいろいろな反省を基に、段々、段々自分が変化して来たのだと思います。

昭和48年の時には、まだ関内や福富町のネオン街が本当にキラキラ光っていました。それまで私は、野球、野球、野球、夜中まで野球。朝起きればすぐ野球。そういう生活でしたので、飲みに行くことなんてなかったんですね。ところが、全国優勝してから誘惑が多くなった。本当に誘惑が多くなりました。飲みに行こう、飲みに行こうと。ただで飲ましてくれました。あの時代は何だったのかなというくらい。まあ、隠していてもしょうがないですが。この会場にうちのOBもいるかもわかりませんし、関係者もいるかもわかりませんが、その当時の横浜高校は、ヨタ高ヨタ高と言われていて、関内や福富町のネオン街で仕事をしている人達も結構いたものです。大体、僕がそこに全然行かないと言ってもたまには足を運んだこともあったのですが。すると、「ヨタ高の監督さんですか。」って、こうですから。その時何とかしたいという気持ちはあったんですね。本当にありました。でも優勝してから、いろいろなお店に連れて行かれると「俺、横浜高校のOBだよ。」とあっちこっちにいるのです。そうしたら今度は、「うちの店に来て飲んで行けよ。あのお客さんに付けとくから。」とかで、恩恵をこうむったりしました。まあ、それほど豊かな時代だったのです。それが失敗の基でした。

全国優勝して、横浜高校の黄金時代が来るのではないかという時に、連続出場はしたものの、その後プツンと行けないんです。練習はやっていましたが、やはり、誘惑に負けて、連れられて飲みに行くことが多くなったんですね。たまたま、そういった時に、いろいろな異業種の方と会うことができたのです。「選手にばかり厳しくしても、おまえ自身が成長しなきゃどうにもならん。もっと監督勉強しろ。」と言われました。それには同じ業種、同じ野球人ばかりと会っていたって仕様がな。今までは、ちょっと有名な監督さんがいれば、もう胸をワクワクドキドキして接していましたけれども。ああ、成る程な。野球以外のスポーツマンや異業種の方、そしていろんな方と接することによって、少しは人間的に幅広くなり、指導できるようになったのかなと思いました。そういった時に、会話というものを思い付きました。スパルタで全国制覇して、2年連続して甲子園に行けましたけど、その後行けない。それはなぜだろう。やはり選手の気持ちを理解しなければいけないと気が付き、それから会話を多くしました。家庭環境も把握するようになりました。

その時代の選手に愛甲という選手がおりまして、第62回大会でしたか。これも夏の大会、待望の夏の大会に全国制覇することにつながるわけです。この時は指導する中で、やはり愛情を持って、そして言葉というものを非常に選んで選手に接しました。厳しさはまだまだありましたが、厳しさプラス彼らの気持ちを把握しようと。

天理との試合ですね。甲子園に行きまして、準決勝ですかね。雨の中での試合で、もう7回で1 - 0。雨天コールドゲーム成立。横浜高校はもうだめだ。7回表に天理が1点を入れて、7回の裏は期待が持てず、もう終わりだなというようなゲームだったんです。もう続行不可能ってような状態でしたけれど、この時に、バッテリーボックスに一番打てない沼沢という選手に打順が回ってきたんです。1 - 0です。チャンス。二塁ランナーにサードの吉岡、一塁ランナーには四球の鳥飼がいました。そこで、一番打てない、打率が低く、2割にもいないような選手がバッテリーボックスに向かうわけです。今はなかなかタイムを取ることは難しいのですが、その当時は大丈夫だったものですから、ちょっと呼んで胸に手をやったら、ガタガタ、ガタガタ震えているんですね。チャンスなのに震えているんですよ。弱ったな。そうして、胸に手をやっていたら段々動悸が治まってきたんですね。やはり、チャンスの時というのはピンチにもなるんだな。勉強でも同じで、いつもは自分で問題を解いていたのに、本番の試験の

時になかなかうまくいかない。野球も同じようで、練習ではうまくいっているのに、土壇場で、さあ、練習の成果を出してみようと言った時にはなかなか出せない。言葉というのを、本当にこの時に大切だと思いました。1割バッターは1割を信頼してやろう。ゼロゼロゼロときた場合、あるいは十何打数0安打という時には希望も何もないように思いますけど、それでも使う以上は信頼してやると言いますか、その信頼がなければ、選手は動きません。

雨の中で、天理のピッチャーは変化球は絶対曲がらない。そのイニングの流れを見ていてもストレートが中心だと、ただそれだけを言ったんですね。後はバットを振る勇氣だと。「沼澤、お前が打たないのは、振る勇氣がない。後は監督が責任取るだけだから、初球から振っていきなさい。」そうしたら、三遊間抜けていったんですね。もう、グラウンドはドロドロです。これで1点入ったんです。あの時、だめだと思って諦めていたら、点は入らないですね。僕は、その時の状況を今でもしっかりと覚えています。諦めたら負けだと。一生懸命努力して、ゲームを捨てない者同士の戦いの中に明、暗があると。だから、だめだ、とんでもないよ、もうできませんよとか言った時には負けなのです。間違いない。監督が諦めた時は負けなんですね。でも、今言いましたように、死に物狂いでしがみついても負けるんですけど、この負けは、僕は選手に言っていますが、これは敗北者じゃない。明暗が分かれただけで、必ず次に生きるだろうし、野球をやめても、君らの今後の人生にとって大きな糧になるはずだということ。だから、勝利至上主義ではありませんけれど、目的を持った以上、そこにしがみついても、登りつめていく姿勢がなければだめだということとその時に学び、今でもそのことは、今の選手にも伝えていきます。「あっ、あいつの番か、だめだ。」それでは打てないですよ。願ってもない、このチャンスにあんな選手に回ってきたと思うと、伝わっていくんですかね、監督の気持ち。それでは絶対だめです。もう間違ってもヒットなんて出ることないです、これは。こういうことで、私は、あの大会で、言葉には味と真理があると思いました。

それと同時期に、NHKのあの頃のアナウンサーに鈴木文弥さんという方がおられました。「監督、いい野球やっていますね。」「いや、僕は野球なんかまだわからないよ。何がいい野球ですか。」僕は、常に円陣を組んでいる時に腰を落として、そういうことを頭においてやっていたわけじゃないですが、そういうことというのは、膝を曲げて座れば、全部視線が一緒になるんですね。すると、アイコンタクトといいますが、言葉を交わさない選手でも、私の目を見てうなずく。これもその時に勉強しました。あれは意識的にやったわけじゃないですが、鈴木さんがそれをおっしゃいました。最近は立ったり座ったりすると、メニエール症候群みたいに目が回るの、横着して立っている時もありますが、なるべく座って円陣を組んで作戦を授けます。



それから、その後の早実との決勝戦でしょうかね。最近、松坂やダルビッシュが騒がれました。楽天の田中、騒がれています。その時は荒木大輔ですね、早実の。今の斉藤君以上に凄い人気があったのではないのでしょうか。この荒木君とうちの愛甲との投げ合いですけれども、この時も言葉というのは大事だなと思いました。決勝戦です。愛甲がガンガン打たれました。でもまだ勝っていたものですから、向こうも羽賀君というピッチャーにスイッチして、うちも川戸というピッチャーにスイッチしたんです。

この川戸が、神奈川県大会の直前に合宿所から脱走して行くんですね。愛甲ばかり使ってい

るものですから。普段は愛甲、愛甲でいいんですよ。「何だ、監督は愛甲ばかりひいきにして。」この川戸というのはね、高校野球の選手には、本当にあの当時の川戸を見せてあげたい。もう、自分のピッチング練習に、バッティングピッチャー、そして走る、暇さえあれば走る。いつかチャンスが来るだろうということで練習をしていた、本当に素晴らしい選手でした。それがもう、最後の最後にしびれを切らしたんでしょね。監督はチャンスをくれない。ところが、夏の神奈川県大会は非常に過酷なんですよね。あの当時でも7試合8試合です。今は、日程的に余裕を持って、準々決勝の前に1日空けていますが、前はそうではありません。4連投です。ですから、愛甲1人では夏はもたない。何で川戸逃げたのかなと。そこですぐ安西と、川戸と仲の良いもう1人に、「川戸の所へ行って迎えに行ってきたら」と、それと一つだけ言ったんです。「愛甲と川戸はうちのね、2人のエースだ。」それで安西が、「おい、監督がお前をエースだと言っている。」それで、スッと戻って来ました。その時補欠だと言っていたら、僕、彼の仲人やっていますから、「監督、あの時補欠だと言っていたら、僕、絶対行きませんでした。」エースだ、スッと戻ってきた。そして、この川戸が活躍するんですよ。ちゃんと私を信頼してくれてですね。迎えに行ってきた時に、「必ず投げるチャンスが来るんで、我慢してやっててくれ。」と言い、甲子園でも点を取った時に、1回戦の江戸川戦で9-0ぐらいの時に投げさせました。9点取っていますから。「ああ、監督は本当だな。嘘つかないな。」そして、決勝戦。もう喜んで、喜んで。最初はファーボールだったんですけど、その後きちっと抑えて、彼が優勝ピッチャーになったんですよ。愛甲も自分のグローブを川戸に託したんですかね。どっちだったかちょっと忘れちゃったけど。そういう、監督が投げかけた一つの言葉によってチームが、あるいは川戸と愛甲が、一つになって非常に大きな効果を得たと言いますか、あの時に、そういう所に目が行き届かなかったならば、あの優勝はなかったと思うんです。

「絶対に優勝してきてやる」と、この神奈川県決勝の時に大見得を切ったのですよね。それがもう本当に失敗しました。優勝宣言したら、「あいつは生意気だ、生意気だ」と言われて、それでも勝ってしまったものですから大変だったんです。この愛甲の時代も、また全員で優勝旗を返還することができました。

ところが、また勝てなくなるんですね。何で勝てないのだろう。今度は少し昭和48年と違う。飲み歩いて、選手の方をおろそかにしたわけじゃない。いろいろと自分でも考えて、いろいろな人のアドバイスも受けてやってきたわけですが、勝てない。何故だろう。もう違うんですね、選手の気質が。全然違うのです。永川の時代と愛甲の時代と、また今度その後も時代が違うんです。どうすればいいのかを考えました。相手側になって。いろいろと工夫したりしましたが。ああ、そうか。そこに楽しさを入れなければいけないのかな、野球をやっていて苦しいばかりではいかな。楽しいことを楽しくやらさなければいかなと。

愛甲の時に、実は優勝してちょっとアメリカの野球を観るチャンスがありました。高校とそれから大学と。原辰徳選手がジャイアンツに入った時ですね。丁度、ドジャースのマイアミベロビーチで、ジャイアンツとドジャースが合同でキャンプをやっていました。高校、大学では非常に楽しくやっていました。プロは違いますね。それを思い出して、よし、そうだ。楽しくやらないといけないと感じました。何でもかんでも教える、何でもかんでも厳しく、できるまでやれではなくてですね。向こうはそうではなかったのです。久しぶりにこういう席で話をしますけれども、ロスアンゼルスの本当に小さい学校でしたが、黒人の選手が外野を守っていて、二塁打決定で、もう左中間にボールが抜けていっているのに二塁ばかりアウトにしようアウトにしようするんです。それは絶対無理なのです。不可能です。不可能を可能にするなんていう

ことは、それはまあ、可能な時はあるかもしれませんが。例えば、ランナーがつまづいて転んだとかですね。しかし、普通から言えば、サードに投げておけば暴投が出てセカンドランナーはサードに行けない。セカンドの方に投げて、逸れると簡単にサードに行ってしまう。その時に、私だったら、これだけ失敗していたら、会話だなんて言ってもまだ怒りますが、何故か怒りもせず、注意も与えず「メリークリスマス、メリークリスマス。」としか言わないのです。それが何回続きましたかね。5回も6回も「メリークリスマス、メリークリスマス。」反復練習の中ですね。そして、やっとサードに投げた瞬間に「ナイスプレー！」これは凄い。後で通訳の人に聞いたら、3月に行きましたから、クリスマスは12月なので季節はずれのプレーをするなということ監督がその黒人の選手にヒントを与えていたわけです。だから一生懸命本人は考えるわけですね。そういう僅かの時間に。そういうことが大事であるということを考えさせることが大切なんです。考える余裕も与えないで、一方的に我々が押し付けるのでは、それではやはり選手も楽しくないだろう。そこで楽しくやらせ始めたのです。そうしたら、甲子園に行けたのです。もうこういう時代だから、少しスポーツ刈りでもいいのではないかと思って許したら、段々とそのスポーツ刈りをこんなに伸ばしてきたんですね。歯止めが利かなくなってしまう。それでまた甲子園に行けなくなった。緩めたら、今度は厳しさというものはなくなりまして、今まで以上に勝てなくなったのです。それで、また壁にぶつかりながら考え、やはり厳しさも大事だし、チームワークも大事だし、正しい技術も教えなければいけないと思いました。

そんなことの中で、あの松坂の時代に全部の反省を踏まえて、いろいろと取り入れて、小倉という同期と一緒に作り上げていったといえますか。主に僕はピッチャーと精神論しか言いませんけれども。勝てる野球というのは、小倉がいろいろなフォーメーションだとか連携プレーだとかをしてくれるわけです。こういったものが花咲いて、四冠達成ということになったのです。44連勝です。自分でも考えてもみなかった。松坂なんか今、ああいうふうには騒がれていますが、確かに逸材でした。「アンパンマン」みたいに、こんなに丸々太っていて、これでどうして野球できるかなと。ボールは速いですよ。愛甲もこんな、永川もこんなでした。うちのエースになるには「アンパンマン」の顔が一番適しているなんて冗談が飛びますが、本当に、あんなになるとは思っていませんでした。そして、不思議にこのチームは全く問題を起こさない。

今、坦々と話をしてきましたけれども、四十何年間もやっていればですね、正直言っているようなことがあります。でもそこに、『ああ、信頼してくれているんだなあ。よし、私もいろいろな経験を踏まえて彼らを信頼してやろう。私が守らなかつたら、選手は誰が守るんだ。』本当に自分ではいろいろ失敗を繰り返してきましたけれども、選手だけには、私は必死で接してきました。だから、本気で選手と向き合えば、必ず心を開いてくれるというようなことが、松坂の時代に集約されるわけです。

選手で、同級生同士けんかするわけではないし、親までが、普通「何であの子がユニフォームを着るんでしょうね。」と陰口を叩く親がいるものですが、まあ、うちは監督と選手と父兄のハードルが高いものですから、あんまり直接耳に入らないのですが、でも、チクリチクリと耳に入ってくるんです。何であの子がユニフォーム着るのかなと。説明を細かくしないとわからないんですね。確かに、ピッチャー、キャッチャー、二番手のキャッチャー、三番手のピッチャー、それよりももう一人の選手の方が力があるんです。でも、キャッチャーというポジションは、特殊なポジションですから、多少ヘタでも、レギュラーキャッチャーが怪我をしますと代えなければいけないので、どうしても二人必要なんですね。ピッチャーも一人二人余

分に入れとかなければいけない。で、こう、わかるんです、成る程な、そういうことが出てきても仕方ないなと思いますが。まあ、いずれにしても、そういうこともあまり出なかった。親同士も本当にパーフェクトに協力してくれました。だから、あれ程、簡潔に、パッと答えが出てきたチームはないんですね。それでは、その手法を取り入れてやれば間違いない。やっと渡辺野球も、小倉の手を借り、皆様のご支援をいただいて完成したな。まあこれでいい、辞めよう。本当に引退を決意したんですけど、「僕たち残っているんですけど、どうするんですか。」と、下級生が言うものだから、ああそうか、勝つことばかり考えちゃいかんな。まだ僕も定年前だから、もうちょっとやらにゃいかんってことで、携わって来たわけです。

しかし、今言いましたように、その、完璧に成し遂げた松坂の手法はもう当てはまらない。どんどん、IT産業が普及して、メールだとかインターネットを高校生が使うようになってきた。

西武に涌井というのがいるんですが、この選手が選抜に向かったの秋の大会で、大和球場で横浜隼人高校との3回戦の時に、まだ負けてないのにですね、涙を流し始めたのです。その時に僕は滅茶苦茶、もう、遙か昔ですよ、鉄拳制裁なんていうのはね。もうやってない。だけど、あまりにも、エースとして期待しているこの涌井が、まだゲームが終わってないのに泣いている。私の隣で下を向いているのです。「ゲームやってんじゃないか。何、下向いているんだ、お前は。」もう怒鳴りまくったんです。まだ泣いている。「お前みたいな、辞めろ！」結果が出て涙流すのはいいけれども。終わってみたら、試合は結局負けてしまいました、エースがこんなですから。確か、6点か7点くらい取っていたので、まだ負けてないんですよ。ところが、どんどん追いつかれてきて、確かにがんがん打たれ始めたんですけども、まだ負けてない。代わるピッチャーはいませんから投げさせていたんですが、案の定負けてしまったんですね。それで、ゲームが終わった後にロッカールームで滅茶苦茶怒りました。「お前みたいな、辞めろ！」

この時代は、選手と言葉のキャッチボールをやっても全然表情が変わらない。言葉が返ってこない時代になってきたんですね。つい、4年前くらいですよ。彼が2年生くらいですから。彼、今、西武に入って3年目になりますけど、4年前くらいです。まあ、言葉が通じない。それです、辞めてしまうのではないかなと、物凄く心配したんですね。辞めたらどうしようかな。もう、合宿所から家へ帰ってしまったかな。なんて思いながら、ずっと眠らずにいたんですね。そこで、思いついたのがメールなんです。その日に、娘に聞いて一生懸命にメールを覚えて、「お前は横浜高校にとって大事な選手だ。エースなんだ。だから厳しく言うんだよ。」「明日から頑張れ。」と発信したら、「はい、わかりました。ありがとうございます。」「たったそれだけのメールですけども返って来ました。それからは、しばらくメールに味をしめてですね、怒ってはメールを打つ、怒ってはメールを打つ。「はい、ありがとうございます。」「はい、ありがとうございます。頑張ります。」と返って来た。

ところが、今、全然、このメールが効力発揮しない。「監督から絶対メールが来るよ。」って、もう電源を切ってしまう。いや、本当なんです。今度は自分達のメールの遊びで忙しいのでしょうか。監督がメールを打ってたって、今通じませんか。それからはもう、合宿所も11時の消灯時間になったら、携帯電話を全部没収して預かり。それで今は、何を思って子ども達に接していくか、本当に難しい時代に入りまして、私の方が皆さん方に教わりたいという気持ちで一杯なんです。

今、会話を一生懸命、重ねています。毎日毎日、もう野球をやる以上に疲れてしまう。いろいろな事件が、各学校で起きると「いいかな、いいかな。みんなに迷惑がかかるぞ。家族の者

までも迷惑がかかるぞ。一番大事な、みんなが好きな野球ができなくなるぞ。」毎日毎日です。3年生が夏の大会が終わると、それこそメールを打ちます。携帯電話をします。「監督さん、わかっています。」もう心得たものですね。「大丈夫です。きちんと卒業しますから大丈夫です。心配しないでください。」とメールも返ってきます。そのうち、3年生も、しょっちゅうかけるものだから、もう面倒くさい。先程言いましたように、なかなか出ない。次の日の朝になって、「昨日ちょっと返事を出すのを忘れました。すみませんでした。大丈夫です。」でも、今の1、2年生はもっと難しい。何を考えているかわからない。会話を、朝のHRの打ち合わせみたいにやるわけです。でも、こつこつ、こつこつそういう姿勢を見せて、そして、本当に自分のことを思ってくれているんだなと思いますと、向こうはやっぱり我々を信じて動いてくれます。間違いなく。でも、そこまでいくのにね、大変なんですね。

指導者が、10の能力を持っていても、伝達方法によっては選手に伝えた時に、5つしか伝わってなかったら、これはいい指導者とは言えないと私は最近思いました。5つしかなくても、生徒が、選手が、6つ7つ8つと、そこでいろいろと考えながら、今までの経験の中から結びつけて、それで自分のものにしていく。こちらの方が余程教え方がうまい。指導者は勉強しなければいけません、その伝える方法をも勉強しなくてはいけません。そして、スポーツの中では正しいことを伝えていかないと、いくら情熱があっても選手の方が指導者を嫌う。一番うまくなれば、それが一番いいわけですが、でも結果が出ない場合があります。正しいことを教えても結果が出ない場合がある。そこで、いろいろな言葉のやり取りが、やがて生かされてくるんじゃないかなと思います。

昨年、こういう選手がいました。原という千葉から通っていた選手がいて、入ってきてから、通いきれませんか「寮に入れてください。」「いやあ、とてもじゃない。今、寮はいっぱいだから。」本当に急いでいる時はお父さんが、アクアラインを通して、高いお金を払って送っていく。それで、また帰りにはどこかで待っているんでしょうね。まあ、自動車修理工場かなんかをやっているんですかね。多少、経済的には余裕があったのかもわかりませんが、車で通うと3時間近い。その子が、本当に一生懸命にやって、本当にねえ、もう涙が出るぐらいやってる。レギュラーにしたいな。チャンス与えたいな。寮に入りたいな。更はずっと見ていたらやっているんですね、遅くまで。3時間かかるにもかかわらずやっている。それで、2年生の後半から寮に入れたんですよ。涙流して喜びました。さらに、彼は凄く優秀で、ちなみに今、横浜高校は、大学を目指すような学校になりましたけども。そういう経緯の中で、本当に着実に学校も良くなっていますから、成績のいい子も来るようになったと思いますけれども、この子は寝る時間も惜しんで勉強と野球をやっていました。その最後にですよ、最後の夏の大会に、ユニフォームを発表した時に、やはりさっきと同じような関係ですね、力関係の中でユニフォームを着れなかったのです。もう涙を流しました。それで、僕は何て言いますか、『艱難辛苦汝を玉する』なんていう言葉を一つあげて、「いいか。必ず将来役立つよ。」「ありがとうございます。」おそらく、その手紙を彼は未だに持っていると思います。「僕は横浜高校に来て良かった。本当に良かった。」と言ってくれました。



これがですね、愛甲の時に、セカンドに安西という選手がいたんですよ。この安西選手の子どもが、やはり、原と同じくらい努力するんですね。そこで、一人ぐらいいは選手に投票させて

選ばせていいかなと思って、とにかく一生懸命やっている選手を仲間から選べと言ったら、原よりちょっと安西の方が多くてね。安西の倅だから、監督はユニフォームを着せたいのだろうというような噂も入りました。でもそうじゃない。本当に、選手に選ばせたら安西になった。そうしたら、原が「安西だったら僕は何も注文つけることはありません。よく考えると、彼は僕以上にやっていました。僕はよく知っているんです。」と。

私は、3年間保護者と接しません。みんなを同じように見たいからということで。そうすると、何故か、寮にきて私の顔を見ても、スツと行ってしまうような親もいるわけです。そこまで言っていなくて、礼儀は礼儀できちんとしなきゃいかんと思うんですが、変な風潮がありましたですね。でも、その親は全て終わった後に、お風呂のこの蓋をね、置いていってくれました。お風呂入る度に、ああこれは原だな原だな、頑張っているかなと。だから、子どもと接する中で、僕らはいろいろ勉強するんですね。勉強させられるというか。子どもと真剣に付き合っていれば、絶対に彼らは努力する。投げ出さない。どんな生徒でも。ところが、そこに、愛情がなかったら、まあ、冒頭にそういう話をしましたけれど、愛情がなかったら、絶対にそういうことはあり得ない。

笑い話ですが、僕は、最初の頃、自分の家に選手を置いていました。女房に飯炊きなんて言うとな怒られますが、食事の世話をさせていました。その時代ですよ、また、話があっちこっち行きますけど、僕は、滅茶苦茶に厳しかったんですよ。寝かせないで練習させたくらいですから。私が厳しくて「この野郎、監督、この野郎」なんて、後ろからバットで殴りたいなんていう選手はいくらでもいたわけですから。でも、選手にしてみると、奥さんが一生懸命、僕らのために食事を作ってくれているその姿を見ると、一生懸命やらざるを得ない。

それから僕は、二人三人と、できの悪い子やあるいは主力選手にしなきゃいけない子どもを最初の頃は、自分のアパートに泊めていたんです。その子たちの食材を調達するのにね、あの頃は学校をちょっとサボって、パチンコでいろいろと食材を調達してきました。第一次オイルショックの時代ですよ。そういうのを見ているんですね。私がいくら厳しくても、「監督はよう、パチンコ行ってさ、缶詰取って来るんだよな。あれを見るとやらざるを得ないよ。」とかね。もう30年、40年前の話になりますけどね。パチンコやってたって負けるときは負けるんですよ。でも、どうしても負けたくないし、お金もない。娘二人を連れていって、パチンコ屋さんの中で、放し飼いにするんです。そして、玉を拾わすんですね。そうすると、私が拾うと、隣の強面の若いお兄ちゃんが「お前、何やっているんだ、俺のだ。」ところが、娘が拾うと「はい、可愛いね。あげますよ。」と行って、ちょこちょこもらって来るんです。それで本当の話ですけども、それでまた負けずに生き延びて。そのうち、女房が「缶詰より換金だ。」なんて言ってですね、持っていっちゃって。そういうことをして息を継いだことはたくさんあります。それを見ているんですね、見ているんです。

この時代に松岡だとか山際という選手がいました。横須賀の硬派の番長ですけども、こういうのを見ているものですから、必死になってやってくれるんですよ。あの当時、おいっちに、おいっちにの通信簿。おいっちに、おいっちにです。わかるでしょう。しかしね、僕はその時に「お前はね、勉強ができないだけで、頭は悪くないんだよ。」とよくそういうことを言ったんです。監督は「馬鹿、馬鹿とだけは言わなかったな。勉強できないだけだな。」「お前たち、賢いよ。」弱い者はいじめない。硬派の悪で、誰かがいじめられていると、相手をやっつけちゃうという、そういう悪だったんですね。それを悪というのかわかりませんが。それが入ってきて、キャプテンをやらせた。優等生のキャプテンですよ。私より山際の方が、選手をまとめるのが非常にうまい。そして、大東文化大学に行きまして、あの当時、一度も優勝し

たことがない大東文化大学が、この山際や松岡、うちの選手が5, 6人行って優勝したんですね。そして、大学から「いすゞ自動車」に就職しました。この山際がですよ、いすゞのロスアンゼルスロサンゼルスの小さい支店ですが、支店長にまでなった。支社長まで登りつめた。それは、この時代の野球というものが原点にあるから、僕はここまで来れたと思います。この子も僕は、仲人をやったわけですが、なるほど、本当に真剣に向き合っていれば、厳しくてもついてくるんだな。今の時代でも、厳しくてもついてくるんだな。でも愛情がなければ、どんな手法でも、厳しくやっても、この子を良くしてやろうと思わなければついてこないでしょう。

いい例がAという選手で、どもりの選手がいました。僕はねえ、本当にこうやってどもるたびに殴り飛ばしていた。小学校、中学校とどこの医者へ行っても治らなかった、このAという選手がですよ、横浜高校での3年間で治ってしまうんですよ。驚きです。怖いという一念だけでこらえるんですね。「う~ん」と、こう、こらえるんです。あの当時の選手は悪かったものですから、「監督、またやってますよ。」「何だ。治ったんじゃないのか。」そうしたら「う~ん」とこらえる。そういうものが身に付いちゃって、僕が怖いものですから。私も、フツと行って、「何だ、お前は」と殴り飛ばし、ヒュ~と去っていくと、その反動で「はあはあはあ」と息づかいが荒くなってですね、そういう癖まで付いてきた。ところが、厳しくやったら、3年目にピタッと治ったんです。あの時代は、就職はいくらでもありましたけども、なかなか条件が厳しい。でも、その子は面接だけで受かりました。多分、コックでしたか、面接1回ですよ。ところが、本当に、心から彼を治してやろうという気持ちではなく、煩わしいという気持ちでやっていましたから未だに来ないですよ、この子は。手紙も来ません。ああ悪いな、申し訳ないな、そういうふうに、いつも、いつかどこかで会えるんじゃないかなという気持ちでいるんですけど。その当時の選手は、仲人をやったり、うちにも来てくれますけれど、この子だけは、30年経っても、一向に手紙が来るわけじゃない。どこかで元気でやっている、そういう噂も入ってくるわけじゃない。たまに「元気らしいですよ」ということは仲間から聞くことはありますが。やはりこれは愛情がなかったからだと思います。だから、あの富田なんかはね、よく、涙流した時にホームランを打ったと思いますよ。

みなとみらいのランドマークタワー隣のホテルで講演した時に、会場ですっと涙を流しているのがいたんですね。一生懸命聞いてくれて、丁度今のように富田の話をしていたら、涙を流しているのがよくわかったものですからね、『富田に似ているな。だけど、いる訳ないもんね。』と書いていたんです。あんなに厳しくやって、いくらあそこでホームランを打ったって、その後、全然、OB会にも出てこないし、同窓会にも出てこない。手紙も来ない。そう思っていたら富田だったんですね。わんわん泣きながら「監督、久しぶりです。」と言って、追いかけてきたんです。私も非常にうれしくて、もらい泣きをしましたけどね。「ああ、そうか。常に富田のことを気に留めていてよかったな。そういう思いがあるから、どこかで会えるんだな。」というように感じました。まあ、いろいろな失敗談がある中で、こうやって今日まで来れたということは非常に運がいいですし、そして、大勢の人に支えてもらった、ということだと思います。

今年の夏の大会で、横浜高校は私が監督就任して以来初めての、振り逃げで負けました。いや~この時にですね、甲子園への、それが初めてのチャンスだとしたら、食い下がったでしょうね。「冗談じゃないよ。」と。僕が悪いことを何しようと、もうずっと食い下がったと思いますよ。でも、いろいろとやり取りする中で、「ああ、いかな。潔く下がる。それで判定がくつがえるわけじゃない。後々のために、自分が教えなかったのがいけなかった。」と。ところがですよ、3年生にとっては、最後の大会で、もう、めちゃめちゃ厳しい練習やってきた



わけです。手法は変えてもやはり、甲子園で優勝しようというチームを作るためには、過酷な訓練がなければいけないわけですから。それがたった一つの「振り逃げ」で3点を失ってしまったんです。負けた日に帰して、1日だけ次の日を休みにして、翌日から練習を始めたんですけれど。

このキャッチャーの子は小田と言いますが、もう、う~んと心配したんですよ。練習に出られないんじゃないかと。3年生はさすがに何も言わないんですね、さすがに。2年生が「お前のせいで先輩行けなかったじゃないか。」とガンガンやるんですよ。『う~ん。本人が一番きついだろうな。』でも、親に電話したら「大丈夫です。元気です。」「じゃあ、明日、大丈夫ですか。」「大丈夫です。」それで戻って来た。しかし、練習を始めたら、どうもぎこちない。声は出ない。『大丈夫かな、これは。秋に向かって大丈夫かな。』と凄く心配しましたが、敢えてこの子を正キャッチャーとして鍛えた。2年生のキャッチャーもいますけれど、敢えてこの子を秋に向けて、正キャッチャーにするためにしぼりました。まあ、幸いにして、神奈川県、関東大会も優勝して、明治神宮大会も準優勝という成績を残せたわけですけど。常にこれを心配してませんと、どこへ行ってしまうかという、そういう怖さがあります。

60人の部員の中で、1人でも要らない選手はいないと僕は考えています。レギュラー選手だけを、これはもう技術だけで区別しています。でも、精神的には同じように見てやらないと、おそらくチームはうまくまとまっていかないだろうなというのが、長い間の、それこそ経験なんですね。ですから、へたな選手でも、特に上級生の生徒には、声をかける習慣をつけています。「一緒に食事しようか。」とか。

この間、この間と言っても、もう2年ぐらい前になりますけどね。最近、自分の家には選手を置かないんですけども、県外から来た生徒が「もう辞めます。」とあって、1年に入ってすぐ帰ってしまった。僕はすぐ追いかけていきました。いくら説得してもだめなんですよ、どんなことも。「ユニフォームを着られるわけじゃないからいいじゃないか。」と。それこそ長い間監督をやっていて、ああいう選手が一人二人と辞めていくとなると、チームに影響が出てきますから。「チームワークってどうなのかな。ユニフォームを着れようが着れまいが、同じ家族の一員として、迎え入れなきゃいかん。」それで、再度説得をした。「じゃあ、監督が熱心だから、戻ります。でも、野球部には戻りたくない。」と言う。野球部に戻らないと住むところがない。そこで、私の六浦の自宅に泊めました。それまでは、アパートとかを転々とさせながら泊めてきました。女房と二人でのんびりしたいなと思っていましたし、選手を預かるのはきついですから。それに、娘も戻ってきまして、ちびが一人いるんですよ。そのうちに、ちびの部屋を、彼も高校生ですから、開放して、ちびは娘と一緒に寝かせることにしました。そして、何にもアドバイスしない。「早く戻れ、戻れ。」とは言わないですよ。ただ置いて、家族と同じような気持ちで接してですね、2ヶ月間置いときました。そうしたら、変化があった。最初の1ヶ月間ぐらいは、もう女房もね、さすがの女房も「いつまでお父さん置いとくの。もういい加減にしてよ。」なんてね。昔はそんなこと言う女房じゃなかったんですが。「いつまで置いておくの、ねえ。」「いや」じっと我慢して、申し訳ない、家族に申し訳ないと思いつつながら。たまたま、ちびに一生懸命に野球を教えるんですよ。だから、野球が好きなんだな。でも黙っている。そのうち、ちびと仲良くなって「ああそうか。僕が合宿所に戻れば、ちびがこの部屋を使えるんだろ」と、自分に段々と気持ちの変化が出てきたんですね。そして、「監督、戻ります。」と言って戻った。最近ではそういう選手が2、3人いましたけど、みんな戻っています。

先程に戻りますが、レギュラーだけ一生懸命に手を差し伸べた所でどうなるか。やはり底辺

の選手が一生懸命にやる意志を持たなかったら、チームはまとまっていけない。よく、うちの創立者の黒土四郎先生が、大正時代の思想家の後藤静香の詩を、我々教え子に毎日のように格言として伝えてくれました。僕らそれを座右の銘にしていたわけです。「第一歩」という詩です。『十里の旅の第一歩 百里の旅の第一歩 同じ一歩でも覚悟がちがう 三笠山に登る第一歩 富士山に登る第一歩 同じ一歩でも覚悟が違う どこまで行くつもりか どこまで登るつもりか 目標が その日その日を支配する』という、これですけど。これを今、うちの選手たち、『三笠山』といってもわからないんですよ。だから、富士山に登る一歩、エベレストに登る一歩ということで作るわけです。「おい、富士山は多少の重装備をして行けば登れるよ。ところが、エベレストは大変だぞ。うちは、エベレストを目指すんだぞ。いいか、訓練が必要だ。一つ間違えれば転落する。大変なことだ。だから、練習に嘘があってはならない。日々、本当に全力を尽くしてやらなきゃいけない。」そういうことを真剣に毎日毎日伝えていくわけです。意外と浸透していくものですね。諦めないで、毎日やっています。それでも、どこかで、何か問題を起こすんじゃないか、という不安はありますが。あつて当たり前だというふうに私は思っています。大きな間違いがなければ少しくらいのことは、多感な年頃だし、好奇心もあるでしょうし。

私は身体を張って選手を守りたいという気持ちがあります。その中で、ああ、だめだつてことならば、潔く辞めますし。本当にそういう面では、信念を持っています。周りの人に本当に迷惑かけるようなことであれば、これはやめさせなきゃいけないという場合もあるでしょうけれど、いろんな経験の中で覚えて、大人になっていく。そういうことを考えたならば、やはり手を差し伸べてやるということが、また愛情につながって、「よし、頑張ろう。」という、彼らの大きな力になっていくんじゃないかというふうに思ってるわけです。



いろいろな経験もしてきました。ダルビッシュなんか連れて、世界選手権に行ったこともあるんですよ。台湾へ。脳梗塞をやった時で、もう大変暑くて、もうどうにもならなかったですが。もうダルビッシュがだらしがなくてですね、「監督、投げられませんよ。」とかね。なんだこいつは。ダルビッシュ中心に世界選手権に来たのに。案の定、キューバ戦のときにもうだめなんです。「交代!」「交代ですか?」「お前が決めんじゃないよ。監督が決めるんだよ。」でもね、本当はいい

奴なんです。涌井に一生懸命ノックをやってたら、「僕にもノックしてください。」ハートはいいんですけどね。でも、あれがちゃんとしてればね。この台湾戦ですか。世界一になっていたかもわかりません。

AAA大会というのがオーストラリアであつて、僕が最初の監督やつて、これも優勝できたんですよ。中日の福留なんかがいきました。まあ、運がいいんですね。あれでも優勝しちゃうんですからね。そして、世界選手権でも第2位でした。キューバに負けました。まあ、いずれにしてもそういう選手の内面的なものの中に入っていきますと、いろいろと選手の方が大変だというふうに思うんですね。

話があっちこっち行って、まとまりにくくて、大変申し訳ないと思うんですが。僕は、教育というのは「生き物」だと思っています。先程も言いましたように、この「生き物」をどういうふうにするかということ、今は指導する側の方が大変なんですね。昔は「カラスは白い」と言

ったら、「はい」と答えなかったら、もうクビか正座を3、4時間。親もそれを認めてくれていました。戸塚ヨットスクールとか、あるいは農大のワンダーフォーゲルとかいったところで、いろいろな事件が起きました。あれもスポーツですから見直していこうと。僕らもあの頃から少し考えなきゃいけないなということだったように思います。

今、本当に、大袈裟に言えば、一年一年、生徒が育った環境というのは変化しています。いろんな殺人事件も起こっていますし。そんなことがないように願って、野球によって、少しでも社会に出て立派に通用するような人間を育てられればと思っています。まあ63歳になりまして「辞めたい、辞めたい。」と言っても、ちっとも辞めさしてくれませんが。ここで、「後何年やるんですか。」と聞かれて「あと2年です。」なんて言うと、「ああ渡辺、辞めるのか。もう選手は送らない。」なんていう話も聞くわけですが。まだまだここでは「やります。」と言っておきながら、2年後には「辞めたいなあ」なんて思っています。

とにかく、長い経験によって、養われて固められた知識というのは、先程も冒頭に言いましたように、自分の人生にとっては非常に有意義ですけれども、今の子どもたちには必ずしも当てはまりません。「それでは、監督の信念は何ですか。」と聞かれるんですが、私の信念は変わらない。野球を通して子どもを良くしていく。手法は変えていきます。その手法を変えたが為に、今日まで来れたんだと思います。

確かに、昔から比べれば、礼儀ができないしだらしがない。家庭環境もそうです。個人の食、孤独の食。みんなが一緒にテーブルで食べても、違うものを食べる。お父さんが帰らないで、子どもが早ければ自分一人で食べる。お母さんもパートに行き帰って来たら自分一人で食べる。みんな違う。『食』は人を良くすると書きますが、本当にそうだなと思います。だから、合宿所でも「同じものをきちっと食べなさいよ。」と指導するわけです。好き嫌いがあります。「食物アレルギーがあれば辞めなさい。」という指導はしますが、「食べず嫌いだったら食べなさい。」と指導します。何故かということも懇々と説明をするんですね。我がままにつながっていくんですね。食べるのがあまりにもひどかったの。まあ今、合宿所は、娘が二代目でやっています。栄養士の免許を取ったりして、四苦八苦ししながらやっているのですが、それでも残す。だから私らも、誰かしら指導者がそこにいて、一緒に食べるようにしています。食事ぐらいは楽しく食べさせようと思って、生徒だけにするんですが、上級生が「腹いっぱいだ。食べてくれ。」と下級生に渡す。下級生はこの辺まで入って、一生懸命。上級生は本当に腹いっぱい下級生に渡すのかということ、そうじゃない。コンビニへ行って、さあ〜と、自分の好きなものを買ってくる。でもこれもですね、本当に忍耐強く接して、言っていけばわかると思います。

まあ、本当に難しい時代に入りました。指導者が非常に難しいと思います。僕なんか、この脳梗塞なんていうのは、ストレスが溜まって。水分を補給しなかったとか、そういう問題ではなくて、なんかこの血栓が飛ぶっていいですかね、心房細胞の血栓が飛ぶ。そういう脳梗塞だったようです。まあ早く処置したものですから、大事に至らなかったんですが。まあ、いずれにしても、指導者の方は大変だと思います。

自分なりの指導方法というのは、どんな方法があってもいいと思うんですね。黙っていても指導です。手を加えても指導です。怒っても指導です。いろんな指導があります。でも、この子にはどの指導がいいか。それは、基本的には、僕は愛情だっていうふうに思います。

取り留めのない話で、行ったり来たりで、本当に理解しにくい点があったかと思えますけれど、ここらで終わらせていただきたいと思います。本当は皆さん方から、僕もいろいろな悩みを抱えていますので、本当にいろいろなことを教わりたいと思っています。機会がありました

ら、そういうチャンスの際に、いろいろディスカッションしたいと思っています。  
長い間、御静聴ありがとうございました。

#### 【講師略歴】

昭和19年 神奈川県生まれ

昭和40年 横浜高等学校硬式野球部コーチに就任

昭和43年 同校で監督に就任

昭和48年 第45回選抜高等学校野球大会で初出場での初優勝を達成

昭和55年 第62回全国高等学校野球選手権大会優勝

平成10年 第70回選抜・第80回選手権連覇（史上5校目）、国民体育大会優勝の3冠を含む史上初年間無敗を達成

平成18年 第78回選抜高等学校野球大会優勝

甲子園に通算21回出場し、43勝は歴代4位。今もなお、松坂大輔（レッドソックス）、涌井秀章（西武ライオンズ）、成瀬善久（千葉ロッテマリーンズ）など多くのプロ野球選手を輩出する名監督である。

#### 【主な著書】

「もっと自分を好きになれ！～迷っているより、歩き出せ！胸を張れ！」

青春出版社、平成11年

「もっと自分を好きになれ！～ドタン場の勝負を支える本当に強い心とは～」

青春出版社、平成14年

「若者との接し方～できない子どもの育成力～」

角川書店、平成18年

「いつも滑り込みセーフ（わが人生(3)）」

神奈川新聞社、平成18年

「ひたむきに～松坂大輔、“超一流”への道～」

双葉社、平成19年

## 第2部 シンポジウム

コーディネーター

パネリスト

早瀬 健介 氏（東京女子体育大学准教授）

加藤 保房 氏（神奈川県スポーツ指導者連絡協議会会長）

天野 勤 氏（聖徳大学教授）

金川 純子 氏（やんちゃるジム代表・相模原市教育委員会委員）

（早瀬）



基調講演で渡辺先生に人と人とのかかわりの大切さ、人に愛情を持って接すること、コミュニケーションの重要性、さらには、本気で向かい合うことなどについて基調講演をいただきました。本日はこれを受けて、中でも「総合型地域スポーツクラブ」をその一つの切り口としてシンポジウムを進めてまいりたいと思います。

まず、シンポジウムの趣旨について説明いたします。

自由時間の増大や少子高齢化の進展など、先程の基調講演でもお話がありましたが、私たちを取り巻く社会環境は急激に変化をきております。そして都市化や生活の利便化など、生活環境の変化は、私たちの身体を動かす機会を減少させる傾向にあり、精神的ス

トレスをも増大させるなど人々の心身に少なからず影響を与えていると考えられます。これらについては、勿論私たち大人もそうですが、子どもについても同様のことがいえるのではないかと思います。

現在、学校現場においては、不登校やいじめといった様々な問題が表出しており、次世代を担う子どもたちの健全な育成が重要課題となり、何かと話題の「生きる力」を培っていく上でも、スポーツ環境も含め子どもを取り巻く環境を整えていくことが必要ではないのかと考えます。

そこで今回のシンポジウムは、「スポーツが高める人間力」をテーマに、様々なところに散在している今日的課題に対して、実際に生活をしている地域においてどのような取り組みをしていくことが良いのかについて、スポーツを一つのきっかけとして考えてみたいと思います。そして、最近良く使われる言葉ですが、地域の「協働」のあり方などについても考えてみたいと思います。

本日は、地域において実際に多様な取り組みをされている先生方にお話をいただきながら、今後の活動の在り方、「協働」の可能性などについて探ってみたいと考えます。

本日の配付資料の「かながわ教育ビジョン」のパンフレットを御覧ください。この中の、教育ビジョン概要に、「基本理念」、「教育目標」があります。未来を開く、創る、生きる、人間力あふれる神奈川の人づくりという基本理念に対し、たくましく生きる力、思いやる力、社会と関わる力、の三つの教育目標が掲げられています。

今日はこのビジョンでいう「思いやる力」に関連して加藤先生から、「生涯にわたりスポーツを通して社会と関わっていく力」に関連して天野先生から、そして「たくましく生きる力」に関連して金川先生からお話をいただき、その後、各先生からの補足説明を入れながら、ディスカッションを進めて参りたいと考えます。

尚、シンポジウムには時間に限りがあり、かなりタイトな設定の中でシンポジウムの進行となります。そこで、配布資料中のアンケート用紙に質問等を記入していただき、それらへの回答は、神奈川県の総合型クラブの育成支援を行い、広域スポーツセンターの機能を持ち合わせている県立体育センターのHPにおいて掲載させていただく形で対応させていただきたいと考えています。

県内各地から参加いただいた方々には多少ご不満もあるかと思いますが、限られた時間の中

で、実際に現場で活躍されている先生方に少しでも多くのお話をいただき、参加された方々に今後に向けた何らかのヒントをお持ち帰りいただければとの考えであることより、何卒御理解いただきたいと思います。

最初の発表は、「スポーツ指導者が取り組むもう一つの社会貢献を！」のテーマで、神奈川県スポーツ指導者連絡協議会会長の加藤保房先生よりご発表いただきます。

(加藤)



みなさんこんにちは。改めまして加藤と申します。今、司会の方からお話がありましたように、「スポーツ指導者が取り組むもうひとつの社会貢献を！」ということで、今年の5月23日に神奈川県体育協会の山下会長から各種目競技団体含めてスポーツ団体に、いじめについてみんなで取り組もうという決起大会がございました。その内容を含めて、今後我々がどのように取り組んだらいいかという話を中心にしたしたいと思います。

スポーツ団体は今まで、スポーツを通じて永年社会に貢献してきているのですが、今、大きな社会問題となっているいじめについて考えてみようということです。

今までの状況を把握しますと、学校、家庭の問題ということから社会全体の問題として、多くの団体や機関の積極的な取り組みが必要であることが考えられます。そこで、私たち指導者としては、活動の現場で多くの青少年とスポーツを通して向き合っていますので、そういう中で、ルールを守ること、先程、渡辺先生の話がありましたようにこのルールを守らせる、ルールを守ることが大事だというようなことを含め、フェアプレーの精神で、青少年の健全な育成に大きく貢献していきたい。明るい活力がある社会、神奈川づくりに貢献していきたいという神奈川県体育協会の取り組みについて十分理解して、私たちスポーツ指導者連絡協議会が、一緒になって取り組んで行こうということが、今日の趣旨設定になるかと思えます。

その背景には、先般、新聞紙上に、昨年と比べていじめが6倍強という記事が出ておりました。神奈川県にしても、5倍に膨れ上がっているというような状況があります。そうした中で、いじめについては多くの児童生徒の自殺者を出し、現在大きな社会問題となっています。行政としては、教育委員会、学校、PTAを中心に学校の先生と生徒を対象に取り組みが行われています。また、学校、PTAのみでなく、たくさんの団体が取り組みを進めています。このいじめについては一向に少なくなっていないという。今年全国で12万5000件ということで6倍強、神奈川では5倍になっている。小学校については約5倍、中学校と高校については約2倍になっているという現状があります。そういうことで、なかなか減っていないということが言える。

今回の取り組みのポイントですが、現実としてはけんかや対立、摩擦のない人間関係はない訳ですね。そういう中で、人間には知恵と加減ができる。

スポーツを通じてそのルールを充実させることが大切である。この気持ちを広げて、人間関係の重要性を訴えるということ趣旨としていきたい。そして今回はいじめで悩んでいる子どもを対象にしたものではなく、いじめそのものをなくすことを目指していることを念頭においていただきたい。

取り組みの具体方策ですが、指導者、選手、スポーツをする者が決していじめに加わったり、いじめをしてはならない。先程、渡辺先生の話の中にも出てきたように、スポーツをする者はいじめをしてはいけないと思います。先程さまざまな場面でということがありましたが、団体役員会議では、いじめ防止にスポーツ界として取り組みを進め、指導者が理解し、自由に選手に伝えていくことが大切だということを会議の中で逐次やってほしいと思っています。

競技大会におきましては、スポーツ選手、スポーツは相手選手と戦うことであって日頃の訓練したものを競い合うものであるということを役員の方は考えて欲しい。審判長については、このフェアプレーの精神というものを発揮するというを常日頃から訴えて欲しい。選手宣誓については必ず「フェアプレーの精神に則り」というのを選手宣誓の中で訴えていただきたいということをおっしゃいます。

私どもは指導者研修会で自主研修をしております。今年もいじめについては3回ほどやってきております。研修会の中では、いじめについて皆さんが教えているジュニアや青少年について、常日頃、こういうことがあってはならないというようなことを含めて皆さんに協力をお願いしている。

それから練習の時に指導者や選手はどういうことをするのか。要するに、卑劣な行為はしてはならない。弱い者いじめは行ってはいけない。いじめを見たら、それを防止するような心の強い子どもを育てていきたいということです。それが真のスポーツマンだということを教えていく。

大会の終わりには、指導者が親に対して、我がチームの選手はルールを守って、明るい振る舞いでスポーツを楽しみたいと思っているということを伝えていく。そして、明るく元気で楽しくスポーツができる環境を作って行きたい。

指導者にとってのキーワードとして考えていきたいのは「三つのふりかけ」。「三つのふりかけ」というのは、一つは「目をかける」。目をまずかけて、真剣にその子を考えてやるのが大事だと思いますので、まず「目をかける」。二つ目が「気をかける」。三つ目が「話しかける」。真剣にその子の立場に立って、この子は何を考えているのかを考える。一番大事なのは、スポーツをする中で「目」に元気がある子どもたちを指導していくことだろう。これは指導者の現場じゃなくても家の中でも活用できると思います。

もう一つは、この「三つのふりかけ」をすることによって、心が心を育てるといいますか、ね。「こういうことはだめなんだよ、こういうことがいいんだよ」ということを含めて心が心を育てていくことを信念に持ちながら指導に当たるといえることが大事だと思います。そして山下会長が日常生活でもフェアプレーだと。スポーツで大切なことはルールを守ることだ、フェアプレーの精神で。いじめはフェアプレーの精神に反する行為だということで、こういうポスターができております。これは、体育センターをはじめ様々な所に貼られていると思いますが、こういった形でスポーツ行政、それからスポーツ団体を含めて、いじめの問題についてしっかりと取り組もう、ということです。

キーワードは「三つのふりかけ」ですが、ポイントはやはり青少年の育成ということに行き着くのかなと思います。短いですが、こういう形でいじめについて取り組んでる姿勢を皆さんにご理解いただければいいかなと。そして指導現場で一人でも明るい子どもを作る、目に力のある子どもをつくる、ということが我々に課せられた課題ではないかと思います。これをみんなと一緒にやっていきたいということでご提案させていただきました。御静聴ありがとうございました。

(早瀬)

加藤先生どうもありがとうございました。

続きまして、「子ども達にさまざまなスポーツとの出会いの機会を」テーマに、聖徳大学人文学部教授の天野勤先生よりご発表いただきます。

先生、宜しくお願い致します。



(天野)

それでは皆さん、改めましてこんにちは。ご紹介いただきました聖徳大学の天野と申します。私は小さいながら地元の市で、レクリエーション協会の運営などもやっておりますので、そういう立場も含めて、レクリエーション指導者の側から少し問題提起も含めて発表させていただきます。

「生涯スポーツは、何のために行うのか？」というテーマを、話をいただいてから、ちょっと考えてみました。今回「スポーツが高める人間力」という全体テーマである訳ですが。

生涯スポーツをよく考えてみると、本来は人間力を高めるために行う、というよりも、結果として人間力が高まってくる、という考え方ができる。それは、やはりスポーツが素晴らしい力をもっているから

だと思ふのです。

スポーツが他のアクティビティーと比べて違うのは、やはり三拍子揃っている。精神的にも、身体的にも社会的にもスポーツをやることによっていろいろな効果が期待できるところにあります。その結果として人間力が高まってくるという考え方ができます。

この辺を確認させていただいたうえでもう少し考えてみると、人間力を高めること、そのものを目的にしてしまうと、スポーツ嫌いな子どもを育てる、または、作ってしまうことにもつながる。だから、気をつけてやりましょうよという提案です。決してスポーツそのものを否定するわけではなくて、迫り方というかやり方、その辺を少し気をつけてやらなければいけないなという気がいたしました。

では、生涯スポーツが目指すものというのは一体何だろう。という具合に考えますと、そもそもスポーツというのは、スポーツすること自体が目的、これが手段ではなく、本来はスポーツすること自体が目的となってもいいのかなと思います。でもちょっとその辺も膨らませて考えた時に、究極的には、我々がスポーツをすることによって、我々の生活が豊かで生き生きと潤いのある生活になる、というのが最終的な理想ではないかと思うんですね。スポーツをやって不幸になってしまったらこれはいけないですね。国民のスポーツ的自立、自分のスポーツは自分でできるよという状態になれば一番いいんですけど、まあこれは理想ですね。理想ですからなかなかそうはいかない。そこで、スポーツ、レクリエーションの支援ということ考えた時に個人個人が抱えている自立を阻害している要因、そんなものを一つ一つ洗い出してその解決のお手伝いをする。これがスポーツの支援になってくるのではないかなという気がいたします。

ライフスタイルというのは人それぞれみんな違います。自分のライフスタイルにあったスポーツというものを自分の力で、日常的継続的に続けてこそ生涯スポーツになるし、また人間力を高めるような結果もついてくるだろうということもあります。

それぞれのライフステージというものを考えてみると、少年期ではまず多様なスポーツ体験をする、ということが求められてくるかなと思います。

まだまだ固まってないこの時期というのは、色々なスポーツを体験してみる。スポーツのみならず、小さい頃というのは発達から考えた時にいろいろな活動を経験する、スポーツや文化や芸術を小さいうちから体験するということがとても大切なような気がいたします。

それからやはり小さい頃はスポーツを楽しむことが大切。これは大きくなってからも当然そうですけど、特に小さいうちに楽しむ心、感覚的に楽しむ心、これを身に付けてもらう。というのは、感覚というのは3歳4歳5歳あるいは6歳7歳、その辺で決定される。センスもそうですね。スポーツセンスなんていうものも、かなり小さいころの活動に影響を受けるということが実証されているんですね。ですから、この頃にいろんな活動を行ったり、楽しむというこ



とが基盤になると大人になってからのいろいろな所にいい具合に発展していくと言われてい  
ます。

それからこの時期に大切なのは、人間力にもありますように、生涯スポーツにつながるよ  
うな基本的な力を身に付けてもらうことですね。

次に、青年期になると、多様なスポーツを体験するというのも続いてありますけど、今度  
はそのスポーツの楽しみ方というものが多様になってくる、という気がいたします。行うスポ  
ーツというのが一番理想ですが、いつでも自分でできるという訳でもありませんから、できな  
いときには見て楽しむとか、いろいろな楽しみ方というのがある訳ですね。多様な楽しみ方を  
しながら、同時にその中で自分が生涯続けていけるような、そういったスポーツを見つけ  
る。そんなことが青年期にできるといいなという気がいたします。

そして壮年期。この辺になってくると、自分にあったスポーツというものを、自分にあつた  
ライフスタイルの中で落ち着いて日常的継続的に楽しんでいくというような姿ですね。これは  
老年期にも続くわけですが、でも老年期は、ともするとやり過ぎて故障してしまうといけませ  
んから、ライフスタイルの中で、自分のできる無理のないスポーツの楽しみ方を確立するとい  
うような大きなイメージですけど。そうすると、そのライフステージごとのイメージと言いま  
しょうか、目標というものに合わせてスポーツ支援というものを考えていくと、方法ややるこ  
とが見えてくるというような図式になってくる訳ですね。

例えば少年期。最初のうちはどうしても教育的な手法というものも多く取り入れられるので  
はないかと思えますね。あるいは、インストラクションのような直接フェイス トゥ フェイス  
の関係で技術を指導するものも。このようなものから次第にライフステージが上に行くほど、  
環境づくりとか日常的に楽しんでいけるような仕組みづくりとか、そういうものがより求めら  
れてくるのではないかと思います。

少年期に話を戻しますと、少年期に大切なことというのは、いろいろなスポーツを含んだい  
ろんな活動といってもいいかも知れませんが、いろいろなスポーツを体験する。それを考えた  
時に指導者は、子どもとさまざまなスポーツの出会いの場を先ず用意してやるということが最  
初の一步になるのではないかと思います。同時に、一方では、子どもと一緒に楽しむ仲間との  
出会い。これも大切ですね。皆さんご承知のように、スポーツを続けていくのに、スポーツに  
限らずいろいろな所でいわれますが、「三間」ということが言われますよね。場所や時間、こ  
れも大切ですが、同時に仲間の存在というものは非常に大きいですね。この仲間の所にもう少  
し着目をして、子どもたちに考えさせたり、子どもたちを信じて指導者が接するというこ  
ともあるかも知れませんが、子どもたち同士が信じあう信頼あうというような働きかけ、仲間同  
士から生まれてくる相互作用みたいなものですね、そういうことをもっともっとスポーツの中  
にうまく取り入れていくと、人間力がより育成されてくるのではないかという気がいたします。

この少年期にさまざまなスポーツと出会い、そしてさまざまな仲間と出会うことによって、  
子どもたちの中に大変バランスのいい、いろいろな感覚、あるいは社会性、そういったものが  
備わってくるのではないのでしょうか。したがって一緒に楽しむ仲間というのは、必ずしも子  
ども同士ばかりでなく、子どもから高齢者まで、いろんな仲間がいてもいいじゃないかと思  
うんですね。ともすると、同世代の子どもだけを考えがちですが、特に競技スポーツでは、生涯  
スポーツということから考えると、いろいろな世代がいてもおかしくない。いろいろな世代の  
人達、これも仲間だよ、というようなそういう発想。その中で、触れ合っていくことによって期  
待できることが、特に人間力を考えた時に、自然と生まれてくるのではないかという気がしま  
す。

それを具体的な形に置き換えてみると、実は総合型地域スポーツクラブ、このあたりに非常  
に色濃く見られるのではないかという気がする訳です。総合型地域スポーツクラブを手や足の  
届く所にいろいろ用意しておく。そして、総合型地域スポーツクラブのいい所は、スポーツの

みならずいろんな活動、広い意味でのスポーツ、これをいろいろ入れられるというところですよ。

例えば野外活動みたいなもの。一時、子どもが昆虫採取することの是非なんていうのがよく問われた時代がありますね。これは自然破壊につながるのではないか。でも、最近の考え方として、小さい頃に昆虫採取なんかをして、それが大人になった時に、その楽しさやその体験が蘇ってくる。あの時の活動楽しかったな、ああいうことをもう一度やりたいな、自分の子どもたちにああいう活動やらせたいな、そのためには、昆虫がいなければいけないのではないか、昆虫が育つためには環境が必要だ、自然環境が必要だ、やはり自然環境を守らなければいけない、というようなところにつながってくる。ですから、そういう体験をさせるということはとても大切だというようなことが言われております。そういうことからいろいろな活動を入れることによって、人間力というものにいろいろつながってくる。

それから仲間もそうですね。地域の中で子どもだけではなくて、大人も含めていろいろな楽しみ方を入れていく。例えば、高齢者の方が中心となっている総合型地域スポーツクラブがあったとしますね。子どももいて、大人もいて、普段は違う種目を楽しんでいる。そんな中に高齢者の方が西洋型のクラブみたいな社交的な要素を取り入れて、たまには種目を超えて忘年会をみんなでやろうよ、なんて言った時に、自分で作った農産物なんかを使って楽しい郷土料理を紹介してくれる。なんていうことがあってもいいかもしれない。そうするとまたまた、そこで新しい触れ合いができるし、そのことによって子どもたちが社会へとつながっていく道筋ができてくる訳ですね。そういうさまざまな活動の総合的な結果として、人間力が高まっていくのではないのかな、という気がいたします。

という訳で私の持ち時間は、あっという間になくなってしまいました。ひとまずこの辺で私の発表を終わらせていただきたいと思います。

(早瀬)

天野先生、どうもありがとうございました。

子どものスポーツ環境、スポーツとの出会いの場を中心にお話いただきました。

最後の発表になりますが、実際に子どもの活動の場を作っておられる、「やんちゃるジム」代表・相模原市教育委員の金川純子先生に「日本の子ども達にスポーツの道をひらけ」をテーマにご発表いただきます。



(金川)

こんにちは、金川です。実際に総合型地域スポーツクラブを運営しています、「やんちゃるジム」という団体の金川純子です。宜しくお願い致します。

こちらにいらっしゃる方みなさん、スポーツが楽しいものだと考えている方が多いと思います。私も含め大学時代は運動部にいたし、友達も活発だし、身近にいる人はスポーツ関係者が多いです。しかしですね、私は女子高の体育の教員もしていますけれど、その教員になったことによりその思いは覆されました。先程の渡辺先生のお話にもありましたが、渡辺先生はスポーツ界ではエリートのお話でしたが、私の仕事先の学校ではそれどころではありません。授業ではあまりにも低い運動能力。飛んでくるボールやバウンドボールの軌跡が読み取れなかったり、ラケットの面が作れない。動きの予測ができない。視野が狭い。ドリブルができない。スポーツテストでは腹筋ができない。反復横とびができない。まあ、これではスポーツはつまらない科目です。

4月の始めに、中学校1年生でドッジボールをやったことがあるんですがドッジボールが成

り立たないんです。中学校1年生なのに。小学校時代に必ずやっているはずなのですが、ドッジボールのゲームが進みません。それは後ほど少し話します。先程の話でもあったように、部活に入ってくる子どもたちの技術も変わるし、心も変わるというような時代の変化があると思います。

先程の天野先生のお話にも重なる所がありますが、運動するのに適している時期というのを皆さんもご存知だと思います。体にも成長の順番があるように、運動の発達にも時期があります。先程、幼少期に必要なと言われていた運動の動作の取得は、やはり低学年のうち。それから粘り強さが出て、中学校に入って筋力が付いてくる、というようなことになっていると思いますので、私が行ってる中学校では、動作の習得をさせるには時期が遅いということです。

小さい頃にたくさんの運動経験をさせることが大切だというお話を天野先生からいただきましたが、私も実際に今子どもが3人います。勿論、私もスポーツ界の人間ですので、子どもたちにはいろんな運動体験をさせたいと思って、小さい頃からいろいろな所で取り組みました。3人子どもがいますのでお月謝は3倍です。体操教室、スポーツ教室、テニススクール、リトミック教室、あらゆる子どもたちのサークルに参加して、子どもたちにいろいろな体験をさせたいと思いましたが、もうお月謝だけでとても手軽に体験させるようなものではありませんでした。

それから、地域クラブ。野球教室とか少年野球とかサッカークラブとか、主にそういうところが地域で運動できる場所だと思いますが、そこにも大きなハードルがあります。先程言われていたようにレギュラー争いとか、それから勝利至上主義というふうに、勝つことに目標があるクラブばかりが目にとまりました。そして、民間クラブに入れようと思っても、3人兄弟がいるとせいぜい一つですね。水泳だったら水泳、体操だったら体操。多くの種目を体験させるというには無理がありました。

それから、運動できる環境というのは公園や空き地ということですが、昔は自由に遊べましたけれど、今は子どもたちで「いってらっしゃい。」って送り出すには、ちょっと時代的にも危ないものを感じます。それで、子どもたちは運動の楽しさを知る前に、こんな弊害があるので、先に何を知ってしまうかということとゲームの楽しさ、室内遊びの楽しさを知ってしまって、運動をする楽しさの前にこんな楽しいことを発見してしまう訳です。

以前に聞いたことがあります。近年のスポーツテストの集計を見ても平均値は極端に下がっている訳ではないということでした。できる子どもとできない子どもの二極化が起こっているそうです。先程ドッジボールの話をしました。ドッジボールが成り立たないということも両極端化の現われだと思います。仕事先の学校は、キリスト教主義の女子校で、静かに生活するのが好きなお子さんが多いです。小学校時代のドッジボールでは、運動の得意な野球少年やサッカー少年を中心にゲームを進め、その他多くの子どもは、そのスピードとか力についていけずにただ時を過ごしていたのではないかと想像できます。ですから、私学女子中学校に進学し、任せていたタイプの仲間がいなくてゲームが進まないということだったのでないかと思っています。まあ、内野にいるときは逃げることはしますが、外野に出るとボールを持ったとしても投げずに誰かに渡してしまう。それどころか、数人の塊になって隅っこにいるため外野でボールが回らない。自分の足元にボールが転がってきても取ろうとしない。これではドッジボールが楽しいとは感じないです。運動のできる唯一の野球少年にしる、サッカー少年にしる、民間クラブにしる、レギュラー争いがある訳で、まあ、ほんの一握りの子どもたちだけが、スポーツを楽しんでいるとか接していることになっているのではないかと思います。またそこに入ると、簡単に休めないとか、親の当番があるとか。そう考えると、今、日本のスポーツ環境を見渡しても、簡単に、ただ運動を楽しむ、その運動の動作の習得に必要な運動を楽しむ環境というのはなかなか見当たりません。

昔、近所にあったただの空き地のような環境。遊べなくなった子どもたちに、意識的にその

環境を作ってあげることが必要だと強く感じたのです。専門家に家庭教師のように教えてもらうスポーツの携わり方もあってよし。それから、先程の渡辺先生のスポーツアスリート主義、養成あってよし。スポーツクラブもあってよし。しかし、私たちが一番大切に思いたい、ひと昔前のような山や川、自然の中で遊んでるだけで自然と運動の動作が身に付いていたような運動環境があってもいいと思いませんか。

「やんちゃるジム」では、このような昔のよいところを何とか復活するような環境を作り上げる活動をしています。スポーツはこうあって欲しいなとか、こうできるといいなというお話はよく聞きますが、「やんちゃるジム」は実際にそのようなことをやっています。昔は、異年代の子どもと遊ぶと、近所のお兄さんやお姉さんがいて、運動神経抜群のヒーローがいましたよね。そのお兄ちゃんやお姉ちゃんに憧れて、運動のコツを伝授してもらったり、学んで、見てまねっこするうちにできるようになったものです。先程、渡辺先生も言われましたが、目の横から投げることを特に教わった訳ではなくて、みんなでそれを自然に学んでいた。昔はそういう人たちが多かったですよ、という話がありましたけれども、実際にそういうことが復活できるといいな、と思っています。レギュラーというのは、人数が限られ、一握りです。実は、それ以外の人たち、子どもたちの方がとても多い訳です。

この「やんちゃるジム」はまさしく子育て、子どもが成長していく途中に、人気があるな、求められているなと感じるのはその会員さんの数にも感じられます。2000年に始めたこの活動で7年目になりますが、現在、530名程の会員さんと入会待ちで行列のできるスポーツクラブだと思っています。

通常の運動能力とは、スポーツテストで測れるようなものですが、私たちは子育て中ということもありまして、人間そのものの力というものに注目しています。気がついたのは、赤ちゃんは、言葉がわからないのに見ただけですぐ動作を習得しているのですね。おうちで異年代の子どもと遊ばなくなった訳ですから、お母さんやお父さんと接することが多いのですが。例えば、お父さんやお母さんの柔軟体操を見てあれが柔軟体操だと思われては困りますよね。良いものに触れるチャンスがすごく減ってると感じました。

そこで、私たちが見つけた力というのは、学生時代運動部に青春を費やしていたパパやママの力です。私たちは、神奈川インターハイがあった頃の選手で、高校生の時代ですけれども。神奈川インターハイの頃は、とても神奈川県も私たちのことを鍛えてくれようとして、凄くスポーツ界にエネルギーのあった時代ではないかと思えます。その時代のパパやママが実は、実際に今子育てしている最中なのです。そこで私たちの活動は、その親子活動の形をとり、昔の運動神経抜群のヒーローのお兄さんやお姉さんの役割をお父さんやお母さんにやってもらえます。あんなに青春時代を費やした部活動なのに、その後ほとんどの人はそれ以来その技術を生かすことなく過ごしてきたはずです。この今まで眠っていた力が、子どもたちの運動神経を磨き始めたのです。このように、ありとあらゆる場所で、ありとあらゆるパパとママがいろんな種目を、少しずつ教えるというのではなく、昔のヒーロー的な存在で遊んでいます。

人が増えればサッカーや野球、陸上、エアロビクス、ゴルフ、卓球、バドミントン、バレーボールと、活動が限りなく広がっていくわけです。会員さんが増えれば増えるほど取り組める種目も増える訳ですね。

たくさん種目を同時にやるわけですから、子どもはいろんなものに気が散りがちなのですが、大好きなものを選べる。これが、私たちの取り組みの一番いいところだと思っています。ラーメン博物館やお祭りの出店のようにワクワクするんですね。自分が綿飴を一番に食べたかったら綿飴のところに行きますよね。私たちも縄跳びをやりたかったら縄跳びの所に一番に行く訳です。そこで、この時に活躍するのが、その昔運動をしていた人たちなのです。パパやママもデスクやキッチンでメタボリックになってる場合じゃないんですね。一緒に夢中になってスポーツをします。

小学校の非常勤講師をしたこともあります。人間はうまくできていると感じました。この頃の子どもたちって、ちゃんと運動が大好きなのです。一番動作を習得するのに適した時期に、動き回りたいたいようになっているのです。すごく元気なのです。体育系の大学で小学校の免許を取れる所が少ないので、小学校には運動の専門家がないのも問題だと感じています。教員でなくても小学生で元気のある動き回りたいたい子どもの近くには、元気を生かせる若い体育専門家がいてもいいのではないかと感じます。

この時期に体を使って遊ぶと楽しいとか、動くと楽しめるような運動神経、感覚を育ててから、ゲームの楽しさより先に体を動かす楽しさを知ることができ、苦でなく自然にスポーツに取り組み、そのスポーツを通じて人間形成を成し得るチャンスを得られる人が増えるのではないのでしょうか。

私たちが挑戦している総合型地域スポーツクラブとはそんな分野を担っていく、日本の子どもたちの運動環境を救う活動ではないかと思っています。このような活動を多くの方に知ってもらい、多くの地域に広がっていくのが夢です。これで発表を終わります。ありがとうございました。

(早瀬)

ありがとうございました。

ここで、本日天野先生がご発表いただいたことに関連する映像をお持ちになっているとのことですから、皆さんにそれを先にご覧になっていただいてから、ディスカッションに移りたいと思います。

(天野)

はい。これからちょっとだけご覧いただきたいと思いますが、地域でレクリエーション協会が関わっている社会福祉協議会主催の福祉スポーツ大会というのがありますが、そこで、今まで障害者向けのいろんなスポーツをやってきました。そこに、今年度新たにレクリエーション協会でもレクリエーションダンスを提案してやってみたところ、とてもその皆さんにうまくフィットし、そこでの体験がとても好評で、障害者の皆さんから継続してやりたい、という声が上がってきたんですね。そこで、その施設にレクリエーション協会から指導者を派遣して定期的にやっているという場面です。【映像あり】

「お魚天国」という皆さんよくご存知の踊り、これをちょっと障害者向けにアレンジしたものを今やっています。ダンスのいい所は、障害があっても、今、障害というのは全国的に一つの個性の延長だという具合に考えられているわけですが、個性に合わせた動きができる。対戦相手がいるとそういう訳にはいかないところもありますが、大きく動く人は大きく、車椅子に座っている人は手だけでいろんな状況が作れますので、今まであまりこういうことやってなかったのですが、今年やったところ、障害者の皆さんからやりたいという声が出てきた。その辺のところに着目できるかなということでご紹介をさせていただきました。いろんな経験の「出会いの場」を、我々にできることとして、用意するという一つの例ですね。

(早瀬)

それではディスカッションに移ります。

先生方からの発表をいただき、今日は「協働」のあり方を探ってみたい訳ですが、まず、少し補足説明をかねてお聞きしたいところがあります。

はじめにご発表いただいた加藤先生には、指導者の役割、特に今回はいじめについてどのような取り組みをされてい



るのかについてお話をいただきました。しかし指導者は、いじめについてはばかり取り組んでいる訳ではありません。その他にもさまざまな取り組みを行っており、さらなる地域スポーツ振興に向け、核となる人材が必要であるということについてこのフロアーにいらっしゃる皆様方は異論のないところだと思います。人材活用に向け様々な地域においてスポーツリーダーバンクが準備されています。ただ、リーダーバンクに登録していても声がかからないことが多いようなことを、私は何度か聞いたことがあります。そこで、実際のリーダーバンクの活用方法について考える必要があると思いますが、この現状も含めて、指導者の活用方法についてもう少しお話をいただけますか。

(加藤)

指導者の活用方法については、競技団体やこういったシンポジウム、あるいはいろんな講演の中でも聞かれていると思います。奇しくも早瀬先生とは8年前に、日本体育協会のスポーツコンベンションの中で一緒にやった経緯があります。その時私がやったのは、スポーツ指導者のネットワーク作りをどうしたらいいかという大きいテーマをいただきまして、体育センターの方にいろいろお世話いただきながら、データをいただき、だいぶ資料を集めさせていただきました。そういう中で、どこの地域でも指導者バンクはあるんですね。神奈川県では体育センターがスポーツバンクを束ねてた経緯がありました。そういう中で、実際問題使われているのがだいたい1割くらい。延べで1割ですから、おそらく7、8%くらいじゃないかと思うんですね。指導者はどういうアピールの仕方をするか。うちの協議会の中でいつも言っているのが、各市町村で行事があつたら、そこへ行って協力するような体制を作つたらどうかと。これは足で稼ぎなさいということだと思つたんですね。ただ、待ちの姿勢じゃなくて攻めの姿勢でやつたらどうかと。こういう話を常日頃、理事会の中でお話をさせていただいております。

もう一つは行政サイドのお話になってきますが、やはりコーディネーターする人。それをまとめて、どのようにそれを展開していくのか。こういうところが、何かいつも後手後手に回っているのかなということを感じます。

(早瀬)

ありがとうございます。

登録している人の約1割が活用されているということでは、やはりもったいない気がしますね。やはり、指導者の方々を登録して終わりではなく、そこからもう一步、自らが進んで働きかけるということが必要になってくるのかもしれない。また、本コンベンションは神奈川県教育委員会の主催ですが、神奈川県立体育センターも、今後もより積極的に関与していくことが益々求められるようにも思います。これら動きについて、今回(財)日本レクリエーション協会からのパネリストでもある天野先生に、クラブ運営に携わる、関わる人材をいかにコーディネートしていくかという点について(財)日本レクリエーション協会の取り組みもふまえながら補足説明いただけますか。

(天野)

はい。その話に入る前に、先程の人材バンクについてちょっと触れさせていただいてもよろしいでしょうか。

私が住んでる埼玉県にもスポーツリーダーバンクがありますし、それから私もかつて、前の職場で人材バンクの運営をしていたことがあるのですが、この人材バンクというのはなかなか機能しない。全国でもこれがうまくいっているところというのはほとんどない状況ですね。それは何故かという、人材バンクに登録したいという人がいた時に、大きく二つに分かれると思うのです。割りりと緩やかに希望する人を登録すると、たくさんの方が登録されますね。それが

ら、厳しい審査をして登録をするという場合がありますが、緩やかにやるとほとんど使い物に、何て言うか失礼ですが、ならないような人がたくさん登録される。じゃあ、うんと厳しくしたらいいかということ、なかなか今度それを維持していくのが大変なんですね。審査をして、そして定期的に活動をチェックしたり維持運営していくのがとても大変だし、それをやった結果、残るような人というのは、実はとくに地域でよく知られているというような人が多くて、もう直接みんなその人に交渉してしまうという実態があるんですね。

では、どういう人を実際に地域で生かしていったらいいのか、活動していただいたらいいのかということ、種目の指導者はたくさんいらっしゃいますよね。いろいろなスポーツ種目の指導者。この方の動きというのは、当然自分の種目について一生懸命普及、指導をしようとする。ところがなかなか種目以外のことには関心を示さなかったりするので。さっき私が最終的に結論の方へ持っていった総合型地域スポーツクラブみたいなものと、種目の指導や普及だけを考えていたのではなかなかうまく運営できないということがありますから。それを横断的に、種目を越えたコーディネイトやマネジメントができる指導者が必要になってきます。こういう人材は、体協の指導者だとか体指だとかあるいはレクリエーション関係の指導者に求めると、こういう指導者は種目型ではありませんので広く見られるわけです。さらに体育センターみたいな所とか、スポーツ以外の団体としてもPTAとか地元の自治会だとか、いろんな団体、種目団体、種目の指導者、種目以外の指導者、いろいろな人が一緒になってネットワークを作りながら進めていかないとうまく展開していかないのではないのかなという気がします。



(早瀬)

ありがとうございます。

登録指導者といっても、やはり実際の顔の見える指導者がリーダーバンクにいないといけないう感じがします。

そうした時に、(財)日本体育協会や(財)日本レクリエーション協会、そして各県の加盟組織が、積極的にコーディネイト役としてバックアップをする、また、体育指導委員をはじめとする既存の団体の方々の協力も得てリーダーバンクを育成していかなければいけないという気がします。

ここで、実際にそういう顔の見える指導者、多くの方々がクラブ育成に参画しているということで先程発表いただいた金川先生に、実際に「やんちゃるジム」を運営してみて、実際に地域がどのように変わってきたのかについて、少し補足発言をお願いします。

(金川)

先程の渡辺先生の基調講演にもありましたが、指導するときには愛情が必要ということで、人間から出てくるエネルギーというのは、愛情が多ければエネルギーも多いと思っているんですけど。私たちが地域でやっているのは、身近な地域なのでまずその地域へ愛情があります。それから、これは途中で気がついたことなのですが、その活動をしていくとお互いの呼び方が変わってきたんですね。ちょっと早瀬先生を例にとりて。早瀬先生は早瀬健介先生なのですが、一番最初に出会った時には早瀬先生と呼んでました。それから例えば早瀬先生のお子さんが健一君だったとしたら、次は健一君パパという名前になりました。その次には、最後までも仲良しになると健介さん、というような名前呼び方になっていくのをその活動を通じて感じたんですけども。やっぱりそこに知り合いであるというような、そういうエネルギーが出てきました。まあ子どもたちと接している訳で、自分の子どもの友達だから力も出して

こう、みたいな感じでその地域にすごくいろいろな力がみなぎってくるのを感じたんですね。それでやはり、スポーツを通じて子どもたちと大人たちが仲良しになっていくということ自体が、地域力アップに繋がったのではないかなと思っています。

道端で出会って、ちょっと悪いことしている子がいても「やんちゃるジム」の仲間であると「何だよ。そんなことしたらだめじゃないか。」と気軽に声をかけられるような地域になっていっているような気がします。

それからもう一つですが、何年か経つと運動のコツを身に付けている子どもたちというのが多くなって来るんですね。そうすると、同じ地域に住む自分より年下の子どもたちに、運動のコツを伝えてあげるとか。そうすると自分も嬉しいわけですね。子どもたち自身が。そうすると、誰かの役に立っているというような実感を小さい頃に経験ができる訳です。その経験から、誰かの役に立つと嬉しいんだ、というのが身に付いていることにより、今現在、アルバイトばかりをして生活しているようなニートたちの、ああいう問題にも小さいころからの生活とか地域で育っていく環境に繋がっているのではないかなと思います。そんなことで地域力に繋がっているのではないかなと思います。

(早瀬)

ありがとうございます。

私も今、金川先生がいわれたような話を九州のある市町村で聞いたことがあります。

そこは総合型のクラブですが、クラブを通して地域の大人と子どもたちが触れ合うことにより、初めはあいさつできなかつた子どもたちが、街中ですれ違った時にあいさつができるようになってきた。明らかに子どもたちの目の色が変わってきたと。逆に、大人も総合型クラブに参加してきている子どもだからということで、つまらないこととしていたら、はっきりそれについて注意をすることができるようになる。今の社会は、自宅やマンションの隣に誰が住んでいるのかよく知らない、わからないようなところがありますが、総合型クラブが、よく見えなかった顔を見えるようにするきっかけとなったということ、その地域の教育委員会の方からいわれたことを覚えています。

地域教育力という言葉がよくいわれますが、地域スポーツクラブはある意味大きな貢献をする可能性を秘めている気がします。「やんちゃるジム」もそうですが、はじめは子どものことを考え地域住民が集まることになるわけですが、スポーツとは、子どもだけのものではないと思います。当然、私たち大人も関係していくものだと思いますし、関与していくべきだと思いますが、その点について天野先生何かご発言いただけますか。

(天野)

まさにその通りで、私は大学で児童学科というところにいますので、普段は子どものことを考えているんですが、レクリエーションでは、福祉レクリエーションの方が専門なんですね。そちらの方では高齢者のことをいつも考えております。生涯スポーツ、これは勿論子どもから高齢者までということですから。やはり高齢者や大人にとってもスポーツは大切です。関与と同時に自分のためにもスポーツは必要で、大人の間力が貧弱では子どもの人間力も育たないのではないのでしょうか。

しかし、今の世の中ますます世代別になってしまっていて、異年齢の子どもと触れ合ったり、あるいは大人と子ども、三世代で触れ合うことというのはどんどん少なくなっていますよね。また、子どもや高齢者だけの力では触れ合うことが、出会うことができない時代になってき田ともいえます。この出会いや触れ合いを作るためには、そのための場あるいは仕組みというもの、今後は用意していく必要があるのではないかなと思います。



(早瀬)

ありがとうございます。

加藤先生は、実際にこの神奈川県でクラブづくりにも携わられたと伺っています。

ここで、実際に指導者側としてクラブを立ち上げた事例について少しお話いただけますか。

(加藤)

ご存知だと思いますが、「城下町スポーツクラブ」というのが小田原でやっております。

その「城下町スポーツクラブ」は、今から4年ほど前から準備に入って、来年が設立予定です。これは、指導者を中心に立ち上げたクラブでございます。実際問題としてその経緯は話をすると長くなってしまいますが、基本的には、こんなことできないのかなという話が指導者の方から持ち上がったということでございます。何かやってみようではないかという話で。理事会ができておりますが、その中では常に我々が発起人になったような形で総合型を立ち上げてみようじゃないかと。それともう一つは、今、既設のクラブを持ってる指導者がかなりおります。そういうところから突破口を開けないか、指導者を含めて指導者を中心にしたスポーツクラブ、総合型地域スポーツクラブを作り上げて行こうじゃないかということで。その一つとして、4年程前から「城下町スポーツクラブ」が立ち上がって、今、会員が150名ぐらいという話を聞いております。発起した当時は30名ぐらいだったらしいですが。そういう面では、地域に根ざしていく形なのかなと思います。



(早瀬)

指導者といえども、やはり基本は地域住民であり、その地域住民である指導者自らが地域のスポーツ環境を考え、より良いものにしていこうと協力をしてクラブを創っていくことが、一つのあり方かも知れません。ただ、この中にクラブ関係者の方もいらっしゃるかと思いますが、クラブを創っていくうえで、結構大変なことがたくさんあります。何と云っても、今までの日本のスポーツ環境になかったものの一つが総合型地域スポーツクラブだといわれてきました。総合型でなくても地域スポーツクラブといった呼び名でもかまいませんが、何が創設・育成のネックになるのでしょうか。

スポーツを条件づけているものは人(指導者)モノ(施設)そしてお金です。

日本においてスポーツは、まず、体育(教育)という授業で行われ、どちらかというとお金をかけて行うイメージがないところでされてきています。そうしたとき自分のお金でそのスポーツ環境を整えていこうという考えを持つことはきわめて難しいことなのかも知れません。

そのあたりの苦労について、実際にクラブを運営されている金川先生ご発言いただけますか。

(金川)

いろいろな場所や啓発キャラバンなど、いろいろなご意見を聞く中で、やはりこの資金繰りについて、どこのクラブの方も苦労しているという話を聞きます。

私たちは、そういう基盤になるお金、寄付金等は全然使っていません。というのは、先程も話しましたように指導者という形ではなく、異年代の運動ができるお兄さんお姉さんタイプの人に来てもらっています。特に子どもを連れてきているパパだったりするので。その方に直接お金を支払いするという事はしていません。

活動費は、1回1人200円。お月謝制をとっていません。1回1人200円で参加してもらって

います。親も付いてきてもらいますが。考え方として親の果たす役割というのがすごく大きくなっています。1時間の活動ですが、1時間お父さんやお母さんを自給800円でお雇しますよ。その代わりに、普段子どもさんの活動費は1000円ですが、お父さんお母さんの時給を800円にしますから、800円分おまけして200円になっているという考え方で参加してくださいと言いますと、パパやママは800円分働かなきゃいけないと思うので、マットを運ぶにしろボールを投げるにしろ800円分の仕事をしてくれる。このような考えでとてもうまくいっています。

(早瀬)

日本全国がそのようにうまくいけばいいなとは思いますが、なかなか難しいところが現実だと思います。ただ工夫して、ほんの少しずつ知恵を持ち寄ってというところが大事なのかもしれませんね。

今日の先生方の発表の中で、天野先生がライフステージということについてスライドを作っておられました。

平成9年に「保健体育審議会答申」が文部科学省から出されましたが、そこで始めてライフステージ論が示されたように私は記憶しています。そして、その答申が出された頃だと思いますが、スポーツの活動形態が「する」「みる」「ささえる」ということで、「ささえるスポーツ」という文言を国が使い始めたように思います。ある意味、平成9年ぐらいから生涯スポーツにしっかり光があたるようになってきました。勿論、それ以前から行っていた人たちは大勢いると思いますが、明確に生涯スポーツ、日本国民大多数が行っている生涯スポーツにもっと光をあてていく必要があるといわれたのがその頃だと思っています。

それらを受けて、平成12年の「スポーツ振興基本計画」における地域スポーツクラブ育成に結びついているのだと思います。

このライフステージ論についてもう少し天野先生、補足していただけますか。

(天野)

最近の高齢者の特徴として、役割が少なくなっている、ということが一つにありますね。

昔ならそれぞれの家の中にお年寄りが出て、家長みたいな人がいて大家族で威張っていた。そして、昔から伝わってきているいろいろな経験が役に立った。

ところが、今核家族化しているし、昔の経験というものは役に立たない。そうすると高齢者は何に生きがいを見出したらいいいのか。一方で、余暇時間はどんどん増える一方ということがある訳ですね。そんな時に、高齢者が持っている昔ながらの知識、それを生かして子どもたちと接しながら、一方で子どもたちには、今、そういう知識や文化が継承されていないという問題があり、その両方の出会いをすることによって、高齢者は自分の有用感というものぐすぐられる。これによって、役に立っていて生き生きするということがあります。

一方で、子どもの方ではいろいろな昔ながらのいい伝統やいい活動や、そういうものに出会いながら人間としての幅を広げていくということがある訳ですね。ですから、特に役割が少なくなっているようなライフステージにいらっしゃる方に、生き生きできるような活動の場として総合型スポーツクラブのようなもの、あるいは、文部科学省が勧めているような子どもの居場所作りみたいなところに高齢者が関わるということは、とても両者にとっていいことではないかという気がします。

(早瀬)

ありがとうございます。

確かに今、先生が触れられた子どもの居場所作りに関し、「放課後子どもプラン」を文部科学省と厚生労働省が平成19年度から行っています。放課後に学習塾や習い事をしていないとき

の子どもたちを、どこで安全に育ていけばよいのか。

子どもの健やかな成長のための居場所の確保を始め、勉強やスポーツ、文化活動、地域住民との交流など様々なことを充実させていくわけですが、先程来触れている地域で皆がともに子どもを育む、「協働」に大いに関係することだと思います。それを必要とする時代になってきているのかも知れません。

実はもう、シンポジウムの取り纏めの時間帯になってしまいました。

本日のシンポジウムを敢えて、『結論はこのようになりました』と取りまとめる訳ではないのですが、お話いただいた先生方にもう一度、話された内容のまとめという形で3分位ずつお話いただこうと思います。

その後少し話をして閉めたいと思います。まずは、加藤先生から。

(加藤)

今日は青少年にスポットを当てたお話をさせていただきました。我々は、スポーツ団体であり、指導者の仲間としてやるべきことはやはり競技力向上。それから、生涯スポーツに寄与するとことは、やらなきゃいけない責務と責任があると思うんですね。そういう部分で、地域密着型という部分を含めると我々としても青少年にスポットを当てましたが、高齢化社会でもあるわけです。少子高齢化と言われているように。

そういう中で一番高齢者の方が今悩んでいることは何かと言うと、やはり交通手段がないんですよ。そういう関係から行くと、各市町村でコミュニティーバスとかを出して運用してると思うんですね。そういうところまで話を広げながら生涯スポーツを伝授していくような形で、老若男女がスポーツに寄与して、元気な明るい社会を作っていくんだということを念頭におきながら進められたらいいかなと考えております。

(早瀬)

天野先生、お願いします。

(天野)

今の時代は昔のように子どもたちが、原っぱで、異年齢集団やガキ大将中心にして遊んでいられるような古きよき時代の環境にはない訳ですね。そうすると、やはり子どもに対しても大人に対しても日常的に生活化、生活を豊かにということを考えたり、そういうことができる仕組みを作っていくと続かないという時代になってきています。我々支援者に一番求められるのはその辺かなと思います。ともすれば、どうしても技術指導は見えやすいので、そこには意識が行きやすいのですが、技術指導だけではなくて、フェイス トゥ フェイスの関係ではないところにこれから多くの人が力を注いで、いろんな人を支え、そしてそれが自分の生きがいにもなるということが大切になってくるのではないかなという気がいたします。

そして、そういうことを進めていくためにはネットワーク作りということが必要ですけども。ネットワークは、ただ黙ってネットワークを作ろうよ、といってもなかなかうまくいかないので、やはり具体的な事業を進めながらその事業に必要なだから一緒にやりましょう、という形にしていけないとネットワークはできないですよ。だから目的を共有しながら、初めの一步をどこからスタートするのか。それは無理のないところで自分のやりたいことから。その延長にみんなのやりたいことがあるのではないかなという気がいたしました。

(早瀬)

金川先生、お願いします。

(金川)

私たちの総合型地域スポーツクラブは小学校で行っています。神奈川県には、まんべんなく小学校がありますので、気軽に行ける距離ですね。

それから神奈川県の中にはとてもスポーツ好きな人も多いと思いますので、人材もあると思ってます。そういう人たちに私たちの「やんちゃるジム」を参考にさせていただいて、いろんなチャンスを増やしていただければなと思います。

私たちは今「本店」と呼んでいます。一つ隣の小学校に「支店」が増えましたので、そういう支店をたくさん増やしていけるといいと思います。そうやってスポーツが好きな子ども、嫌いじゃない子どもを増やして、中学校や高校で部活動に入ったりすると、神奈川県には今日の講演をさせていただいた渡辺先生のような素敵な指導をスポーツを通じてくださる先生もたくさんいらっしゃると思いますので、スポーツを通じてそういうチャンスと巡りあえる人が増えてくるのではないかなと思います。



(早瀬)

ありがとうございます。

少し前の話ですが、子どもの体を動かす環境に絡めて、ラグビーの平尾誠治さんがお話をされたのを北海道で聴いたことがありました。その時に平尾さんがいわれたのは、今の時代、子どもからゲームを何とかして取りあげなければだめだと。ただ、あのゲームというのは確かにおもしろいということもいっておられました。従って、ゲームよりも体を動かす、体を使って遊ぶことスポーツをすることがおもしろいということ子どもに分からせてあげないとだめだと。そのためには、遊ぶことのできる大人を作らなければいけないというような内容だったと記憶しています。

子どもの教育は、何も家庭や学校が行うばかりではないはず。かつて、子どもたちは同世代の仲間ばかりではなく、異世代の中で遊んでいたはず。それを一概に教育ということはできないかもしれないが、多世代のなかで揉まれていたわけ。それについては本日、各先生方がお話されたところです。その中で、子どもたちは様々な経験を通し知恵を付けていくこととなります。

ただ、今はそのような集団はなかなか見られなくなってきています。ほとんどが小集団であって、それも同世代であったりします。子どもの成長を考えた場合、当然のことですが、多世代との交わりの中で他人を思いやる気持ちや、協力して何かを成し遂げていくことなどの経験を積み上げていくことが大事だと思いますし、それは子どもにとって大切なこと、次世代を担う子どもたちにとっては間違いなく必要なことです。

そのために私たち大人は、何をしてあげることができるのでしょうか。いずれ、私たちが高齢者になった時に私たちを支えるのは子どもたちなのかも知れませんが、その子どもたちを健やかに育てること、それは私たちの責任だと思います。

そのための一つの方法が「やんちゃるジム」のような総合型のクラブなのかもしれません。総合型クラブ育成の発想の原点の一つは、今の社会が抱えているさまざまな問題点に焦点を当てていることにあります。地域住民の健康の保持増進、家族の触れ合いや世代間の交流、青少年の健全育成。学校週5日制実施等をふまえたときの子どもの居場所づくりやその受け皿、よくいわれる地域教育力の再生など、今日的課題に対処するさまざまな効果を期待されているのが総合型クラブだと思います。私たち大人はより良い環境をどのように創り上げていくことができるのだろうか。繰り返しになりますが、協力して働く、協働という考え方、これがとても

大切になってくると思います。

今回、ここにお集まりの皆様はおそらく少なからずスポーツについて縁のある方だと思います。その皆様がほんの少しずつでも力を結集する。ほんの少しだけでもお手伝いをするだけで地域が変わっていくかも知れません。地域住民のちょっとずつの努力で地域を変えていこうという、最初の一步が大切だと思います。

何か新しい取り組みを行い、少し地域を変えていこうとする時ターゲットが重要となってきます。どこを焦点化して突破口を開いていったらよいのかということはよくあるのですが、そのような時、今一番力を結集しやすいのは子どものことかも知れません。勿論、地域におけるスポーツは子どもだけのものではありません。全ての人が豊かな生活を送っていくために必要なものです。しかし、どこか一つ突破口をとということであれば、先ず最初は子どもというところに焦点をしばって地域の考えを取りまとめてみてはいかがでしょうか。

何となくではありますが、私たちは自分のことは後に回すことはできるような気がします。ただこれが子どものためにということであれば、プライオリティーは極めて高いと思います。子どものために地域住民が協力をするという体制は、自分自身のことに比べわりと取り易いのではないのでしょうか。

最近、これもよくいわれる言葉ではありますが「チルドレンファースト」という言葉があります。子どものことを地域の大人が皆で想い、少しずつ協力をして、今日よりも明日、明日よりも明後日、少しでもいいスポーツ環境を創っていく、創り上げていくということが、やはり私たち大人が子どもたちに対してして行おうべきことではないかなと思います。

今日お話をいただいた先生方はいずれも現場で実践をされてきている方ですから、そのお話からは何かしら得るものがあったことと思います。それを皆様方が心に留めていただいて、少し実践をしていただく、もしくはそれにつながるということであれば、本日のシンポジウムを行った価値もあり、また、本日のテーマの「スポーツが高める人間力」について少しは貢献できたのかも知れないと思っております。

拙いコーディネーターで申し訳ありませんでした。パネリストの先生方、そして会場の皆様、長時間お付き合いいただきありがとうございました。



---

平成 19 年度かながわ生涯スポーツ  
コンベンション報告書

発 行 神奈川県立体育センター

〒251-0871 藤沢市善行 7-1-2

電話 (0466) 81-2803

発行日 平成 20(2008)年 2 月

---



神奈川県

体育センター 電話(0466)81-2803 FAX(0466)83-4622

藤沢市善行7-1-2 〒251-0871

ホームページアドレス <http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/40/4317>

この報告書は再生紙を使用しています。